

座談会 細田亜津子著『雲の上の哲学者たち』をめぐって

著者	細田 亜津子, 倉沢 愛子, 中島 成久, 柳原 透, 山本 真鳥
出版者	法政大学経済学部学会
雑誌名	経済志林
巻	75
号	4
ページ	185-249
発行年	2008-03-03
URL	http://hdl.handle.net/10114/5266

【座談会】

細田亜津子著『雲の上の哲学者たち』をめぐる

開 催：2007年11月17日（土） 10時～13時30分

場 所：法政大学BTタワー19F 経済学部資料室

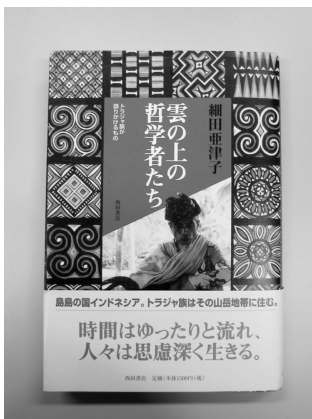
参加者：細田亜津子（長崎国際大学人間社会学部教授）

倉沢 愛子（慶應義塾大学経済学部教授）

中島 成久（法政大学国際文化学部教授）

柳原 透（拓殖大学国際学部教授）

山本 真鳥（法政大学経済学部教授）（司会）



著者近影

【とりあえずは自己紹介】

司会(山本) それでは本日の座談会を始めたいと思います。きょうのテーマは細田亜津子さんが中心なのですが、『雲の上の哲学者たち—トラジャ族が語りかけるもの』というご著書で森嘉兵衛賞を授与されまして、その受賞記念の座談会でございます。

最初に、それぞれ今日参加しておられる方々の自己紹介を簡単にお願いします。ではまず、著者である細田さんから、簡単に。

細田 ご紹介にあずかりました細田亜津子です。私は沖縄の研究がしたくて、法政に入りました。沖縄の研究からだんだん東南アジアの方に目が向いて、特にインドネシアが好きになって、いろいろ回ったのですが、トラジャが私には一番インパクトがありまして、研究したいと思ったんです。トラジャに行くまではやっぱり沖縄の研究でした。

その後、トラジャの研究をしているときに、経済学のイロハがわからないので、それを知ること、そういう視点を持てば、もう少し本当に経済学とは関係ないところで生きているトラジャ族が逆にわかるのではないかなというような甘い気持ちで、大学院に入りました。そのときに柳原先生に出会いまして、いろいろご指導いただきました。

柳原 私は1990年から2000年まで10年間、法政大学におりまして、そのときの私にとって一番やりがいのあった仕事は、国際開発あるいは開発経済学と銘打っていたのですかね、社会人大学院コースというのを立ち上げ運営したことです。そのなかで実に多士多才とめぐり合ったのですが、特筆すべき才であったのが細田さんです。

というわけで、私にとっては細田さんの著作は第1が修士論文、第2が『トラジャ紫の大地』（西田書店、1996年）、そして第3が今回の『雲の上の哲学者たち』ということで、この間の細田さんの歩み、たいへん感銘深く拝見し、特に今回の著書ではここまできたかということで感銘を新たにしております。

中島 中島と申します。専門は文化人類学でインドネシア研究をやって

いまして、最初のころはジャワ研究をやっていたのですが、90年代に入ってから、綾部恒雄先生の東南アジアのエスニシティに関する科研の研究で、ジャワ以外のインドネシアをやれということになりました。それで母系制で有名なミナンカバウ（主に西スマトラに居住）のことをやることにした。この十何年間はずっとミナンカバウのことをやっています。

最近、比較経済研究所の英文紀要にミナンカバウの、特にスハルト退陣以降の土地紛争の問題を書いた論文がありまして、こんなところで恐縮ですがお配りします(笑)。皆さんあとでお読みいただきたいんですけども(と配る)、山本さんに渡していたっけ？

司会 いただいています。(笑)

中島 倉沢先生とはコーネル大学で初めて直接、お目にかかっています。ぼくが最初にコーネルに行ったのは87年で、そのとき倉沢先生は doktor 論文の最後の執筆のときでしたよね。ぼくはB・アンダーソンが非常に好きでコーネルに行ったのですが、それ以来、倉沢先生のご活躍はぼくも身近で知っておりました。

細田さんについては、こういう方が法政から出てこられたのかということを知りまして、たいへん申し訳なく思っているのですが、でも興味深くこの本を読ませていただきまして、新たな世界が見えてきたという気持ちでいます。

倉沢 倉沢愛子と申します。私はずっとジャワのことをやっておりました、1970年の卒業論文以来ずっとインドネシアとかかわりを持っています。最終的にコーネル大学へ博士論文を提出するまでの約20年間は、日本の占領期のジャワの農村の歴史をやっておりました。

それが一段落付いたところでそれを20年もやっていると、見るのも嫌みな感じになったものですから(笑)、しばらく全然違うことをやりたいと思って、スハルトの開発独裁下のジャワの変容をテーマにしました。時代が違ふけど場所は同じ。それで視点も同じ、というのは、日本の統治とスハルトの開発独裁は、統治のメカニズムだとか、動員するときの方法だ

とか、非常に似ているところがあるので、私のなかでは一応、つながっているんです。

ちょうどそのころに名古屋大学で国際開発研究科というのが立ち上がりまして、そこの教員として行ったこともあって、しばらくカッコ付きですけども「開発」みたいなことに触れる機会もあり今日に至っています。

私は1972年に初めてインドネシアに留学しました。そのときはジャカルタが留学先ですが、1度トラジャに行っています。テレビ局の方がトラジャの葬儀についての番組を作るので、通訳のアルバイトで行ったのですが、そのときはとにかくびっくりしました。

お葬式はともかく、トラジャ自体まだ何もないんですね。ホテルも何もなくて、軍の出張者が泊まる宿舎、ウィスマと呼ばれるゲストハウスがあって、そこに泊めてもらったのですが、電気がついたりつかなかったり。そんな状態で、それがマカレという県庁所在地なんですけど、もう少し田舎の方に入っていくと、どこも宿泊施設はないから、村長さんの家とかに泊めていただくんです。

当時ですから、お手洗いもないようなところで、テレビの局の方も女性のディレクターだったのでよかったんですけども、2人して、どうやってお手洗いに行こうとか、そういう苦労をした記憶と、それから当時、ウ



細田亜津子氏と司会の山本真鳥氏

ジュンパンダンと呼ばれたマカッサルからトラジャまでの道のりがものすごくかった。まだ舗装されていなくて、そういうすごくたいへんなところだったというイメージがあるんです。

その後、ずいぶん変わった、観光開発もされたとか、いろいろ話には聞いていて、行きたいなと思っているのですが、行かれないままです。変貌している部分もずいぶん

あるし、前と同じ、ああ、引き続きそうなんだなという部分もあって、このご本はたいへん面白く読ませていただきました。

それから何よりも、すごく細やかな感性を持った方だなと思って、お会いするのを今日、とても楽しみにしてまいりました。

司会 最後に私、司会の山本真鳥です。私は実はほとんど接点がないというか、文化人類学をやっているのですけれども、南太平洋を研究しておりまして、インドネシアは全然行ったことがない。もちろん似たところもあるのですが。それから残念ながら、細田さんとは会っていておかしくないのに、1度もお会いしたことがなくて、いままで本当に残念なことをしています。(笑)

ただ、実は私の先輩の文化人類学者がトラジャを研究しているものから、それから細田さんはちょっと本の中で批判していますけれども(笑)、トラジャの葬儀を撮影した番組を私はちゃんとしっかりビデオに撮っていて、授業でいつも学生に見せたりなんかして使っています。1年に1度～2度見ますので、細かいところまで覚えています。

インドネシアに行ったこともないし、よく知らないのだけれども、トラジャだけはちょっと知っているという感じでしょうか、そういう司会でありますけれども、よろしくお願いいたします。

【作者の思い入れと読者の受け止め方】

司会 まず最初に細田先生にこの本を書いた背景とか意図とか、そういうことを簡単にお話したいと思っているのですけれども。

細田 最初に書いたのが『トラジャ紫の大地』という本です。書いたときは何かトラジャをわかってほしい、わかってほしいという気持ちがすごくあったんですが、それからトラジャの人とかかわっていて、たまたま10年たったときに、トラジャの人を知ってほしいということよりも、自分の中に彼らの気持ちとかが非常に蓄積してきたみたいな感じがあって、それで自然なかたちで何かトラジャの人を書けないかなというのがありました。

それはたとえば文化人類学とか葬儀とか、そういうことでトラジャの人は持ち上げられたり、焦点になるのだけれども、実はそうではなくて、日常生活のなかでトラジャの人たちが生きている姿で私は共感しているので、その部分が本当の意味で生きていく姿と、その先に死があるみたいところで、自然体で書けないかなという気持ちがあって、この本を書きました。

司会 ありがとうございます。先ほど倉沢先生は素朴な感想というところを先にお話しになられているのですけれども、ほかの方はいかがでしょうか。この本について素朴な感想をお願いします。

柳原 細田さんのよさが自然なかたちで出ているなというのが素朴な感想ですね。大学院での指導教員としては、禁欲しろという、つまり社会科学の“たが”というのをあえてはめるというかたちで密に接していました。この本では、細田さんが人間として、どういうことに共感し、どういうことを大事にするのが、非常に自然で素朴ないいかたちで出ている。

中島 最初に興味を持ったのはこのタイトルでして、いかにもレヴィ＝ストロースというような（笑）、タイトルにすごくひかれました。ただ、内容を読ませていただきますと、現在の文化人類学者はおそらくこういうものは書かないだろうなと思いました。そこが一番問題というか、ぼくが興味を持った点であって、細田さんの略歴を見ていますと、沖縄の研究で開発経済学というような専門の研究をされていらっしゃるわけですね。

でも、このなかではそうした専門家でない別の視点というものが非常に出ていて、おそらくこれをお書きになるときは、そういうご自分の専門の勉強はベースとしてあっても、それにあまりとらわれない本であると思いました。先ほど柳原先生はたがをはめるとおっしゃいましたけれども（笑）、そうした学問の切り口からは自由なところでお書きになったご本ではないのかなという感想が素朴なものなんです。

現代の文化人類学者はこういうことはおそらく書かないだろうというのは、彼らに要求されているのはもっと細かいテーマで、たとえば儀礼なら

儀礼を詳細に分析しなさいとか、そうした注文がつくのですけれども、いわばトラジャの日常生活を全身で体験し、それを何とか日本語の文章で表現されたという印象が一番強く残りました。

司会 ありがとうございます。倉沢先生、もし付け加えることがあれば。

倉沢 お二方がおっしゃったことは全く同感でして、学問から離れたというか、学問の専門が何かなんてというのは全然関係なくて、お人柄とか、インドネシアに対する細田さんの視点だとか姿勢というようなものがすごくよく表れていて、それが肩肘張ってみたいな感じではなくて、非常に自然なんですね。それはびっくりしました。

よくこういうものは、「私はこんなにインドネシアを理解しているのよ」みたいなところがちらちら見えたりする本も多いんですけれども、そうではなくて、ごく自然に書いていらっちゃって、ここに登場してくる人たちの顔が浮かんでくるような書き方で、彼ら、彼女たちとの関係もすごく自然なんですね。そのことにとても打たれました。

司会 ありがとうございます。私も実は読んでいて、中島さんがおっしゃるように、人類学者だったらこういうふうには書かない、こういう入り方はしないというようなことを感じました。でも、人類学者が興味を持つようなこともいっぱい興味を持って書かれている。ただ、この方は何でトラジャに行ったのかなとか、何をしてトラジャにいるんだろうとか、そういうことはあまりわからないんですね（笑）。はじめは気になったけど、最後まで読んだときに、ああ、わからなくてもいいやみたいに思った。（笑）

それで今までもおっしゃられた方もありますが、確かに社会全体を、社会構造とか、そういうかたちでとらえるのではなくて、いろいろな人の顔を中心に書かれているというか、昔、中根千枝先生が最初に書かれた『未開の顔・文明の顔』という本がありました。あれも人中心に書かれていて、先生は人類学者だったのだけれども、あまり我々がいま研究で書くような本ではなくて、同じようなエッセイだったんですが、そういうのにすごく似ているなという印象を受けました。

【トラジャ族を紹介】

司会 まずトラジャ族について、また、これも細田さんにお願いしなければいけないのですけれども、ざっとご紹介をいただけますか。

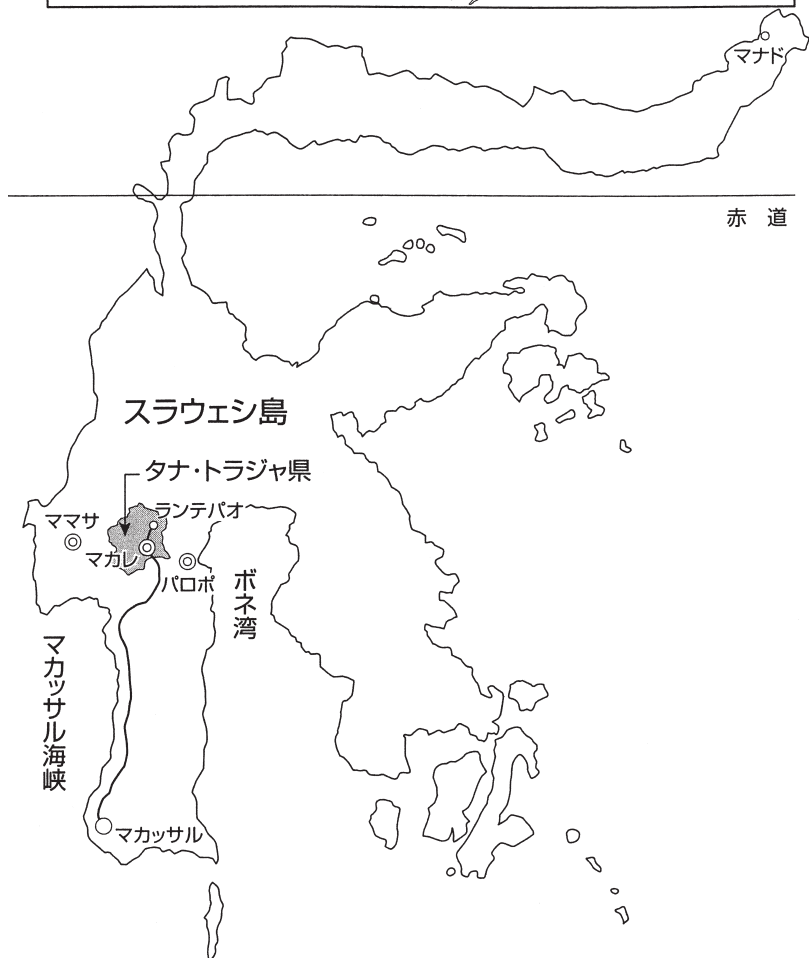
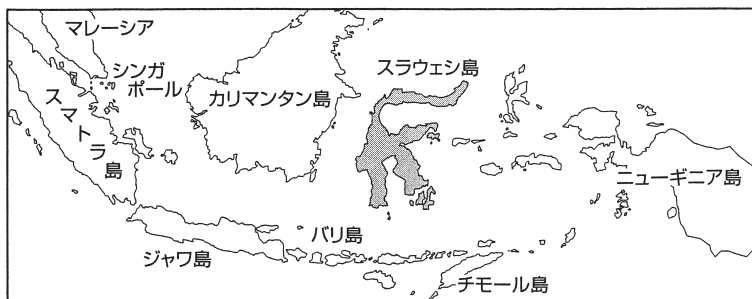
細田 先生がたから感想をいただきありがとうございます。私は倉沢先生の『女が学者になるとき』（草思社、1998年）とか読んで（笑）、先生とジャワのことは知っておりました。でも、私はジャワとかは、何か自分に合わないんですね。合わないというのはどういうことかなということをずっと考えていたりするんです。

先生が初めてインドネシアに行かれたころ、私は沖縄に行ったんです。ベトナム戦争のさなかでした。本当に日常茶飯事にベトナムから死体が運ばれてきたりとか、強姦があるとかという、そういうすごいところだったんです。言葉も沖縄の言葉で全然わからない。

でもそのとき、私は全然、不安がなかったんです。1人で行ったのですけれども、攻撃されたり、いじめられたりとかそういうことは全然ない、不安が全くなかったという感情が心のなかにずっとありました。トラジャに行ったときも同じ感情があったんです。これは何だろうという疑問がずっと心の中にあったのです。どちらもいつでも、何かちょっと「助けて」と言ったら、絶対助けてくれると思えた。それが大きかったと思います。沖縄の人たちも、トラジャの人たちもそうなんだというのが最近わかったんです。

そういうときにジャワやパリの人とかはちょっと違うみたいな、自分の感覚のなかにはすごくそういうのがあって、それでトラジャは行けば心地よい場所というようになったんだと思うんです。

トラジャ族の紹介ですけれども、トラジャ族は山岳民族で600～1700mぐらいのところに住んでいるんですが、2000～3000m級の山々に囲まれていますので、食料が十分でないということがあります。米が十分に行き渡らないところなので、常に30万人ぐらいしか十分に食べていけません。そ



の他は外に出稼ぎに行ったりとか、あと、スラウェシのなかで移住をしていたりします。

それでも葬儀のときには帰ってきて、あとから触れますが、トンコナンという一つの家を中心にして、みんながそこに集まって相互扶助をやっている世界です。

それから、トラジャ族は葬儀を中心にして生きていますけれども、山下晋司先生がおっしゃったような（笑）、死のために生きている人々ということは全然、私は考えなくて、ただ、そういうタイトルをつけなければならないということがあるのだなとは思いますが、とにかく生きることに全霊を傾けて生きていて、それ以外のことはあまり考えない人たちだと思います。つまり私たちが考える、欲を持ったりとか、人を恨んだりということはあまりない人たちだなというのを、ずっと行っているうちにわかるようになりました。

トラジャ族全体ではいつも100万人ぐらいいるんですけれども、もともと住んでいた以外のいろいろなところ、ジャカルタや、スラウェシの他地域にもいます。

司会 ほとんどインドネシア国内ですか。

細田 あとはマレーシアに働きに行ったり。

司会 あそこもインドネシアの人が多いですね。

細田 あと、カリマンタンに行ったりしています。でも、タナ・トラジャ県に住んでいる人は現在43万人ぐらいです。

司会 葬式のときには帰ってくる。

細田 帰ってきます。

倉沢 葬儀の行われる村だけ、ものすごい人口増加が突然起こるんですね。

司会 そのときに帰ってくるから、膨れ上がるんですね。

【哲学者トラジャ人】

柳原 私自身は素人なので、哲学とか思想とかという言葉の使い方がよ

くわからない。わからないというのはつまり、自分自身には使えない言葉なんですね。

それでさっき申し上げたように、細田さんの修士論文、『トラジャ紫の大地』、そしてこのタイトルを付けた本ということで、ホップ、ステップ、ジャンプではないけれども（笑）、ジャンプがあったかと伺ったら、それは全くなかった。10年間、まさにおっしゃったようなかたちでトラジャと付き合ってきて、そしておっしゃったような意図でこの本を書かれたということで、まさに自然体だったのでしょうか。自然体での自分のトラジャに対する思いを表すときのキーワードとして、哲学者とか思想とかということがおのずと出てきた。

それとあえて関連付けて、何か所かいうと、「トラジャは思想空間」という名を冠した章があって、そこでは表現として、トラジャ人というのはどういうふうに考えて生きているかが出てくる。ページでいえば129ページとか138ページあたりです。それで考えた結果として、今の生きるかたちがあるんだと、そういう表現をとっている。

そうであるがゆえに、そこにいと、おまえの思想はあるかと問われるような気分になる。これは文字通り問われるということではなく、そこにいることで自分が自分に問うということですよ。

細田 はい、そうですね。

柳原 だから、こういう表現は無理なく出てくる表現なんですね。「無理なく」とは失礼な言い方なのだけれども、トラジャを表すのに、これが一番適切な表現なのですね。

細田 そうです。無理なく出るようになったということが正しいんですかね。だから、一番最初に『トラジャ紫の大地』を書いたときは、トラジャの人たちはどういうところに住んでいるんだろうという感じだった。トラジャ人は大地が光によって紫色に変わるような土の質ですね。そういうところに住んでいるんです。

そういう幻想的な大地をみてトラジャの人というのはどういう人なんだ

ろうとか考えはじめた。どういうことをやって、どんなことを考えて生きているのかなというようなことにすすんでいった。彼らと一緒に接しているときに、「何で生きているの？」とか質問するというのではなくて、日常生活と一緒にしているときに考えたのが、哲学者と思想空間ということです。10年間でそのなかに言葉として出せるようになったということだと思います。

司会 思想というふうな言葉で表しているのは、生き方というか、どういふふうに人生というのを考えていて、どういふふうに取り組んでいるというほど積極的なのではなくて、非常に自然にそういうことが表れてくるんだと思うんです。そういうことですね。

細田 そうです。

司会 だから、哲学といっても形而上学みたいな感じではない。

柳原 念のためという変な聞き方なのだけれども、トラジャの言語体系に、細田さんがここで哲学とか思想とかということが、どれだけあるのかないのか。たとえば哲学に相当する言葉、思想に相当する言葉があるのか、ないのかということも含めて、そこはどうなんですか。

細田 私が、彼らが哲学者だなというふうにしたのは、生きる先に死があるというのをいつも日常的に考えているというか、それが日常なんです。たとえば、私たちが考えるといったら、例えばなぜ人は生きるのかとか、なぜ人は死ぬのかみたいなことです。私のなかで「生と死」はすごく大きなテーマだったんですね。

だから、そういうのをこれだから生きるんだとか、こういうことがあるから死という概念を持つんだとかということではなくして、日常のなか、毎日の行動のなかにそれがある。やっぱりあの人たちは哲学者なんだなというふうに考えるようになったということなんです。

お聞きになられたのはそういうことじゃないんですか。(笑)

柳原 それはそれでわかるのだけれども、トラジャ人知識人層の中での、自らの言語での表現というのは何かあるんですか。全くないんですか。

細田 言語での表現の哲学者とか、哲学とか、思想ですね。そういうこととはないです。

司会 伝統的社会では一般的にはあまりないのではないですか。私の調査しているサモアなんかだと、そういう話になってくると、現地の知識人は英語にスイッチして、英語でしゃべっています。

柳原 わかりました。

司会 だから、現地の言葉で語っていることは具体的だし、「こういうふうにするものだよ」みたいなことは言うけれども、原則として、抽象的な言葉ではあまり語らないと思うんですが、いかがでしょう。中島さんのフィールドなんか、どうですか。

中島 ぼくは最初にこのタイトルに興味を持ったと言いましたけれども、「哲学者たち」という言葉をお使いになっていて、この本のなかでもトラジャは思想空間というところがありますが、ぼくとしてはおそらくその前の章の「トンコナンで過ごす生と死」という、このへんがおそらく細田さんがお考えになる思想であり、哲学、トラジャにとってのそういうものではないのかなという理解をしたわけです。

ミナンカバウにとって死というのはイスラムの理解のなかで考えられているので、同じ文脈ではないですね。アダット、つまり慣習法の世界ですよ。それでもやはり一つトラジャとミナンカバウという比較は可能であると思います。

倉沢さんに引き継いでもらった方がいいと思いますが。

司会 ジャワ人の哲学とか、いかがでしょう。

倉沢 私も哲学とか思想とかというのは一番弱いのでわからないのですが（笑）、ジャワ人もそれなりにイスラム教徒なんですけれども、ジャワの神秘主義とか、そういったものがあります。私よりも中島さんの方が詳しいでしょうけれども。ジャワはすごく哲学的な世界だと私は思うんです。でも、中身まで私は本当に理解できていません。

ただ、先ほどジャワにいたら、あまり落ち着かないというか、好きでは



倉沢愛子氏

ないとおっしゃって、トラジャに行ったら落ち着いたと、それは何なのかなと先ほどから考えています。

司会 倉沢さんは逆ですか。

倉沢 いや、別に（笑）、やっぱり慣れたところが落ち着くというか、ジャワがそんな

に落ち着かないところとは思わないのですけれども、ジャワ人はふだん非常におとなしいけれども、いざとなるととてもきついところがある。それから、抑圧されたものを秘めて、秘めて、秘めて、あるときぱっと出すというような、ある意味でも怖さもあるんですけれども、トラジャの人たちはそういう起伏はないんですか。

細田 昔は一部首狩りの儀礼もありましたし、起伏が激しいというのは、あると思います。賭け事も好きですし、そういう意味ではけんかもよくしますし、起伏はあると思います。

倉沢 とかく私たちはトラジャ全体の均質な空間として理解して、ミナンカバウならミナンカバウを一つとして、ジャワもそういうふうに見ます。でもきっと、社会のなかに入ってみるといろいろ内部のコンフリクトとか、内部の違いとかいっぱいあって、見ているほど調和的ではないのではないかなと思うんです。トラジャはそういう意味ではどうですか。

【トラジャの地域性と移民】

細田 トラジャは、先生が行かれたマカレとか、南の方の入り口、南部と中央と、それからもっと山の奥の北部とか、その西方のママサとか、西の方につながっていく北部、西部とはちょっとした対立があるんです。

対立というのは南側が先に発展してくるというか、それから南側からブ

ギス人が入ってきて、ブギスとの契約を先に結んでしまっとうまく使うとか、県のインフラも北部、西部は後まわしにしたままとか、そういうことで北部の人は、たぶんいろいろ不満があるのでしょう。だから北部の人たちは南部の人たちをあまりよく思っていないみたいなのはあるんです。トンコナンの建物も違います。それから気質も違うので。いろいろな人や研究者が言っているトラジャとはほとんど南部なんです。けれども、本当に私が好きなのはもっと北部の方のトラジャです。

倉沢 ポソに近い方とか。いま非常に危険なというのか、いろいろな対立があって荒れているところもありますよね。

細田 そっちではなくて、タナ・トラジャ県のなかで、北部のバルuppとか。

倉沢 そっちの方にも人がずいぶん出ているし、私は一昨年だったか、西スラウェシのポレワリというところで3週間ぐらいだけ、学生を連れて村で調査のまねごとみたいなをしたことがあるのですが、そのへんに行くとトラジャ族はいろいろなところで話に上ってきて、彼らの方から見るトラジャ族というのはネガティブなんです。だから、外から、同じインドネシアのスラウェシのなかでも、外から見るトラジャ像と、中から見られる像とずいぶん違うんだなという感じがします。

細田 そうですね。インドネシア人が話していても、トラジャ人はお金をきちんとためて家を建てるとか車を買うとかしないで、葬儀に全部使ってしまうから、愚かな人たちだなどと言う人もいます。

それから、先ほど先生がおっしゃったように、トラジャでは食べていけないのでスラウェシ中部に移住するんです。そうするとトラジャ人だけが集まって集落をつくっていく。その集落なのだけれども、イスラムのなかにキリスト教の人たちが入ってくるので、そこで村を全部焼き打ちされたりとかあるんです。そういうところで対立していくので、ここで焼き打ちされた人は、違うトラジャの集落に行き暮らすようになる。そうすると少し気質が変わってくるとか、そういう対立はスラウェシ中部ではあるん

です。

ただ、トラジャ人がどうしてやっかみを持たれるかということ、そのひとつとして考えられることは米の作り方がうまいからといわれてます。中部に行っても、すぐに水田にして稲を作って、そうして食べる術を身につけ集落をつくるし、キリスト教でもあるから、ちょっとやっかみがあるのかなと思います。

スラウェシ中部の場合、もちろんイスラムとキリスト教の対立があるので、関係なく焼き打ちになりますから、それがスラウェシ中部なんです。トラジャ族というふうに日本で紹介されるのは、だいたいトラジャ県内南とマカレ、ランテパオ周辺やサダンなんです。

司会 それは地域的に文化というか、若干違いがあるんですか。

細田 貧しさが違うというか。

司会 経済的な違い？

細田 経済的なところでは北部の方がもっと山地だから、米がとれないのです。それこそ米の代わりにトウモロコシやヤマイモを食べたりしています。それから換金作物のコーヒーを作っているけど、そんなにたくさんとれないからということもあります。

中島 コーヒーのことがよく出てくるんですよね。トラジャは現在はトアルコ・トラジャのコーヒーで有名なんですけど、コーヒー栽培は現在のトラジャの経済のなかであまり重要ではないのでしょうか。

細田 いや、重要なのですけれども。

司会 一部なんですよ。きっと、一部の人が。

倉沢 地域的にも一部なんですか。

細田 地域的です。コーヒーがとれるのは南部より北部・西部です。だから、それを買い上げるとか。

中島 誰が買い上げるんですか。

細田 マカレ、ランパオに事務所をもつ仲介人。それからブギス人も入って買い上げてそれで輸出するとか。

中島 コーヒーは大きなプランテーションとかで作っている？それとも個人で？

細田 住民栽培です。トアルコ・トラジャが行っているのはプランテーションです。大きなプランテーションを作って、そこで人を雇って、コーヒーを全部管理して作っています。それから、住民が作ったのを買い上げることもやっています。そこで豆を全部選択していって、こっちは買い上げるけどこれはいらぬ、ということで返していく。この返されたのは市場に出ます。そのほかには住民がそれぞれ、北部では自分たちで作っているのを市場にだします。村長の家に集めてそれを売るとかもやっていました。そういうかたちになっています。北部の豆の方がアラビア種で質がいいんです。

倉沢 より涼しい。

細田 そうです。それと寒暖の差があるんです。

【トラジャ社会のなりたち】

柳原 倉沢さんがいまおっしゃった最初のご関心というのは、トラジャのなかでの、どういう基準であれ、さまざまな対立ということですよ。いまおっしゃったなかで、北・南というのはトラジャのなかでの大きな地域ごとの対比ということですね。

それで、言葉にあえてもう1回こだわると、48ページにティンティンさんの話をしているときに、「トラジャでは、現在では階級という言葉を使わないし」とある。つまり、これは過去には使っていたということを含意するのかどうか。現在では階級という言葉を使わないし、階級による差別はない。しかし身分による区別はあるという。

総論としてのトラジャ理解のうえでは区別はあるというところをどれだけ、ただし書きとしてでも、持っておかなければいけないのか、捨象してしまっているのか。

細田 ただし書きとしたら持っていた方がいいのかもしれないです。そ

れは、たとえば建物を建てる時も、昔の王族階級の人は中心柱を立てることができるのに対して、ほかの人はそういうことをしないとかいうことがあります。またほかに、長期の葬儀はできないとかもあります。だから、カッコ書きでは入っている方がすごくよくわかってくる。

柳原 先ほど相互扶助という言葉が使われたときに、図式でいうと横と縦、どちらもどこにでもあるという理解でいいですか。

細田 いいです。横の一番の単位は家族です。それから、親せき親族となります。それでお金のある人がない人ということでも構わないし、村長が村人をということでも、全部、上下と横があると思っています。

柳原 血縁、地縁という頭の整理は役に立ちますか。

細田 立ちますね。それで相互扶助を行う。

柳原 だから、どちらもある？ つまり血縁というのは。

司会 縦に相互扶助というのはあり得ないですね。

柳原 ただ、言葉遣いでね。相互ということの行ったり来たりするものを何と何と見るかなんですよね。

司会 だけど、上下関係では同じものをやりとりしたりしませんよね。

柳原 だから、同じものではないんですよ。しかし、いざ鎌倉じゃないけれども、何かのときに駆けつける、そういうことまで矢印の上下に含めるというのが、拡張解釈ですけどもね。血縁地縁というのは、つまり同様にどちらもあるという言い方でいいんですか。

細田 だから、いま先生が言われたようなことかというと、つまりお金を持っている王族がたくさんの人を、たとえば庭はきなどで雇いますよね。けれども、それは何かあったときには、絶対にその人たちが駆けつけるということだし、それから、昔、首狩りがあったときなんかは、嫌でも一緒に付いていくということがあったと聞いています。そういうことを考えると、これは相互扶助、やっぱり上から下というような感じだけではないというのが、ずっと入って行って感じたことなんです。

倉沢 下からも、ということですね。それはパトロン・クライアント関

係でもそうですよね。相互の関係。

司会 それはそうですよね。

中島 相互扶助というのは基本的にはお葬式を中心とするものですか。

細田 葬式もそうですし、日常生活のなかでそうですね。結婚式のとき、それこそ子どもが大学に行きたいからどうするかというときもそうです。お金を集めるというのもみんなそうです。

倉沢 一定のパターンがありますか。

細田 やっぱりトンコナンを中心にしますね。まずは家族ですが、そこから一番最初のトンコナンの関係まで広がります。そこまで必要がなかったら、家族と兄弟の家族がやる。

司会 トンコナンの家族というのはどのくらいの広がりなんですか。

細田 広大になります。

柳原 だから、遠くの親せきより何とかというような意味で、地縁と血縁をあえて比べるというのは、トラジャ理解にとって意味がある設問ですか。

細田 南部と北部というふうにしたら、そういうことはあるかもしれない。たとえば南部の人たちの地縁と、それから北部の人たちの地縁があるんです。そのときに南部の人たちの子孫が北部に行っているときもあるんです。そのときは遠くの親せきまで入るんです。

柳原 地縁と血縁が基本は重なっている。

細田 はい、重なります。

柳原 だから、識別する理由も必要もない。それが基本形ですか。

細田 はい。

倉沢 遠くに行ってしまったっている場合は？ 多くの方が外に出ているわけですよね。

細田 たとえばカリマントンとか、そういうところですか、はい。

倉沢 ええ。トラジャの外へ出ている人たちの場合でも血縁が非常に強いということになりますか。

細田 血縁がすごく強いです。血縁を頼ってでていく人もいます。だから、葬儀のときには必ず帰ってきますし、結婚式のときにも帰ってきます。

【トンコナン修復プロジェクト】

司会 それではともかく、先に進みましょう。トンコナンのプロジェクトというか、トンコナンの修復とかに深くかかわっておられたのですけれども、今度はお仕事について伺いしたいと思います。どういう経緯で関わって行かれたのですか？ トンコナンの魅力というのも含めて、どうぞお話しくださいませ。

細田 トンコナンを修復しようと思ったのは、最初に行ったときに、何でこんな山の中にこんな技術的に高い建築物があるんだろうという一つの驚きがあったからです。そういうものが朽ちていって、倒れそうなところもある。そうしたら、それはもったいないなと思ったんです。それで、修復したいなと思いました。これは本当に素朴な発想なのです。それが可能かどうかはわからずに、つてがあったので文化庁に頼みに行ったんです。

それで、どうしてそういうことをやらなければいけないかと聞かれたときに、日本は今まで向こうのものを全部持ってきて、展示したりしてきた。アラン（米倉）は、「よかとぴあ」や大阪の民博など日本に持ってきて展示しているけれども、現地できちっと修復して残しているのはないんだと主張した。日本と東南アジアのこれまでの歴史がありましたし、もらうだけではなくて、今度は現地に返していくのがいいんじゃないかと言ったら、比較的きちんと話を聞いてくれた。そして賛成してくれて、それで最初のプロジェクトが始まったんです。

文化庁の人、歴史学者、建築家と調査団を組み調査に行ったのです。バヌア・タンベンという、床下に柱を建てるのではなくて、井桁組みにする建物があるんです。それを調査に行った建築家が保存プロジェクトの対象にしました。バヌア・タンベンは、建築家やトラジャの人たちの説明では、一つ階級の下のもの、つまり奴隷階級のものだと言われています。トンコ



トラジャ人と一緒に修復したトンコナン。屋根の形に特徴がある（シラナン村）



トンコナン正面（世界遺産候補地ケラ・ケス村）



トンコナンのある村の風景（ラボ村）



焼きうちから逃げのび，原野に建ち始めたトラジャ人移住者の家，中央スラウェシ



トンコナンの屋根修復



葬儀の風景，棺桶をアラン（米倉）から運び出しレラッキアン（安置する小屋）に移す



友人ティナのお母さんと父親と夫の棺桶



男性による葬送歌



5日ごとに開かれる水牛市場（ランテパオ・ボリ）



岸壁の墓、骨と死者の生前を忍ぶタウタウ人形

ナンはいろいろなところに残っているけれども、バヌア・タンベンはなく
なっているので、これを修復しようということでした。その修復は財団法人文化財建造物保存協会が国際技術支援ということで実施しました。

そのときに私はトンコナンをやりたいと思っていた。でもできなかった
ので、それでは自分でやろうと思ったんです。全部のトンコナンをまだ調
べていなかったの、その後この本に出てくるティンティンさんとか、
たくさんの人たちに協力してもらって、ほぼ県内全域、どこにどういうト
ンコナンがあるかを調べに行ったんです。それで、北部にはこういうトン
コナンがあると、だいたい自分のなかで地図が描けるようになって、どの
トンコナンがいいかなというのも目星がついて、修復するならいくつ選ぶ
かということも自分でできるようになったんです。

そのときにこれはたまたまなんですけれども、岩手県前沢（前沢牛で有
名）で地域振興の目的で牛の博物館を建てることになっていたのです。前
沢町は世界中の牛の物語を展示したいと考え、彼らがインドネシアの牛を
選んだそうです。インドネシアで、またどこが牛との関係があるのか。水
牛ではなくて、牛だったのですが、トラジャだということに牛の博物館が
たどりついたらしいんです。

それでそのときにはどこかのエージェントが入って、博物館の人たちが
トラジャに調査に行ったんです。そしてトンコナンの前に立てる水牛の角
と、これは葬儀の後に殺した水牛の角を飾るのです。それからカボンゴと
呼ぶ水牛の頭部の彫刻を棟持柱に飾るところに興味をもって、一部を縮小
して、複製なんですけれども、博物館の中にトンコナンを建てるというこ
とになったんです。

そのときにティンティンさんたちと大工たちが岩手県に来て、私を呼び
ました。それで私が岩手県に行くようになって、それが縁で開館第一回の
特別展でサダン・トラジャ展を手伝ったのです。そのとき当時のトラジャ
県知事夫妻をお招きし、トラジャのダンス・グループに来てもらって民族
舞踊の紹介もしました。

その後、トラジャの人たちが帰ってから、岩手県の前沢の人たちが非常に感激をして、特に大工さんたちが自分たちもトラジャの家を見たいと言い出したんです。じゃあ、トラジャに行きましょうとなりました。それで、前沢の人たちが自分たちでできることが何かありませんかと私に言ってきたので、「修復できませんか」という話をしたんです。

それで、トンコナン修復プロジェクトが決まって、緊急にやった方がいいということで、私が調べたもののなかから10棟を選んで、トンコナンのプロジェクトが始まったということです。

司会 全部で何軒ぐらいあるんですか。数えられるぐらいですか。

細田 いや、数えられないほどあるんですけども、集落に行くときまずトンコナンのいいものを聞く。それから、村人は案内してくれるのだけれども、部材がいいとか、それから建て方とかというので、これはすごくいい建物だなというのが自分のなかで判断できるようになってきて、20棟ぐらい、これは絶対に残した方がいいみたいのが頭の中にできたのです。

司会 ちゃんと頭の中にあるんですね!!

細田 そのなかで今年できるもの、来年できるもの、2000年までにできるものということで、牛の博物館の方にこれとこれは絶対やりましょうということになったんです。だから、修復できなかったのもまだたくさんあるんです。

【ミナンカバウの場合】

中島 こういう建築という面から見れば、ミナンカバウにもルマ・ガダンという伝統的な家屋があります。母系制社会の「大きな家」という意味なんですが、ルマ・ガダンもおそらくトンコナンに匹敵するような非常に美しい建築様式でありまして、それなりに注目はされているんです。しかし、ぼくが知る限り、ルマ・ガダンを保存しようというような動きはあまりないし、日本人、日本のどこかの機関がそういう修復にお金を使うというようなことはあまり聞いたことがないですね。

ミナンカバウのルマ・ガダンには、今は成功したムランタウ、出稼ぎ者が建てる。ミナンカバウの外に出て行って、ミナンカバウに帰ることはないけれども、土地との関係を示すうえでの象徴的なものとして、自分の財を使って自分の故郷に巨大なルマ・ガダンをつくります。それから政府とか企業が、擬似ルマ・ガダンというか、建築様式として政府の建物にそういう様式を使っていることがありまして、ミナンカバウの伝統というものが、時代を経ることで少し変質してきている。

ミナンカバウ自身もルマ・ガダンに住むということは、母系制社会の変質のためになくなってきていて、だいたい独立した小さな家に住むようになってきているんですけども、それでもやはり母系制の単位というものは残っています。帰省の機会はトラジャの場合はお葬式なんですけど、ミナンカバウの場合はイスラムですから、断食が明けたラマダンのときに帰ってきます。日ごろはさびれた小さな村に、バス何十台も仕立ててジャカルタから帰ってくるとか、そういうことがよくありました。

細田 トンコナンの場合、ミナンカバウの建物よりは比較的小さいので、たぶん修復のお金も少なくていい。(笑)

中島 ミナンカバウにも小さいものがありますよ(笑)。一般の人が住む住居で、大きなものはむしろ少ないですね。

司会 もう使っていないようなのも、ミナンカバウはずいぶんいっぱいあるんですか。

中島 ミナンカバウ高地の田舎にあるルマ・ガダンでは、もうそんなに補修にお金をかけてない。おばあさんが一人で住んでいて、余った敷地のなかに娘夫婦はコンクリート製の家をつくって、そちらの方が快適だという感じで住んでいるという例もあります。

司会 インドネシア政府がお金を出して修復するということはまずないんですか。

中島 それはないです。ジャカルタのタマン・ミニなら何とか出る、その程度だと思いますけれども。

司会 日本だと民家園みたいなのがいくつかあるでしょう。たとえば川崎あたりに1つ民家園がありますけれども、全国の壊れかかった農家みたいなのを持ってきて、修復して置いておいて、人々に見学してもらう。白川郷の家とか。そういうところが全国に何か所かありますよね。

柳原 何とか公園の話が出てくる。

細田 タマン・ミニ・インドネシア・インダー。

柳原 あれはそういう位置づけもできますか。

細田 あれはジャカルタで全部の民族の建物を見られるということまでできている。

司会 野外博物館みたいなものですか。

中島 全部ではないですけども。州を代表する建物を持っていますね。

司会 全部ではないというのは、インドネシアの場合、民族があまりにも多い、ということ？（笑）

細田 よくわからないのですけれども、トラジャの建物はどうも好かれるんじゃないですか。だから、空港とか、いろいろなところでシンボリックに使われる。でも使われているということを自体、トラジャの人はあまりよく知らない。タマン・ミニ・インドネシア・インダーに入っているのは、この本に出てくるティンティンさんたちもかかわっていたり、県知事の命令で作っているからわかっているのです。でも、たとえばコーヒーバック



中島成久氏

の絵柄にバリ島なんかですごく使われているということは、トラジャの人はあまり知らないです。

司会 最近は伝統文化についてもそういう知的財産権みたいな考え方が出てきてるから、トラジャの人もっと主

張した方がいいかもしれないですね。(笑)

細田 ミナンカバウは民家が儀式の場になるんですか。全然違うんですか。

中島 たとえばお葬式ということですか。

細田 ええ。お葬式というか。

中島 お葬式は20世紀初頭のイスラム改革運動でずい分簡素化され、ルマ・ガダンで村の相互扶助で行なうことが少なくなりました。現在では、村のモスクに遺体を安置して人々の弔問を受け、最後に一族の墓地に埋葬します。結婚式はいろいろな段階があるんですけれども、そういうところで行う場合もあります。

細田 トラジャの場合、トンコナンがすべてなんです。すべてここでいうというのがすごく興味深い。もっと東の方ヌサ・テンガラ・バラット、ヌサ・テンガラ・ティモールに行くとそういう聖なる家、儀式を行う家というのと民家が分かれていますのですが、それに比べると、トラジャは民家そのもののなかで自分たちの生から死まで全部、完結していくんです。だからトンコナンというのがすごく面白くて、これはやっぱり修復したいなと思ったんです。

司会 今は、ミナンカバウみたいにおばあさんが一人住んでいて、ほかの人たちは普通に住んでいるみたいな、そういうお家もいっぱいあるんですか。

細田 あります。やっぱり若者はもっと光が入ってくる家がいいとかとって。

司会 暗いんだ。

細田 ええ、暗いんです。先ほどのお話のように裏手に簡易住居を建てて住んでいたり、仕事のためにマカレとかランテパオに行って、簡易住居に住んでいる人はたくさんいます。

【トンコナン・プロジェクトの受益者】

柳原 いかにも経済学をなりわいとする者にふさわしい殺伐とした訊き方をしますけれども（笑）、このトンコナン・プロジェクトの受益者は誰なんですか。

細田 受益者はトンコナンの、その家族だと思っています。

柳原 特定の修復したトンコナン？

細田 はい。

柳原 それが受益の「益」というのをどういう意味で語るのか。たとえば私自身感銘深く読んだところなのだけれども、91ページに「トンコナン」という言葉、まず言葉自体がカギカッコ付きで出てきて、それで繁栄、幸福、安寧、まさにPHPなんですが、建物としてのトンコナンがどういう状態であるかということ、それがそこに住む人たちにとって持つ意義との間にかなりはっきりとした対応関係がある、と書かれている。そういう意味で、建物を直すことが願いを込める象徴としての役割をより良く果たせるようになるんだと、そういう言い方をしているんですか。

細田 受益者のほうがですか。

柳原 このパラグラフで書いてあることを言い換えると、建物がぼろだと有難味がなくなる、ところが建物が立派になると、機能をより完全に果たすようになるんだ、そういう形式論理を当てはめていいですか。

細田 建物の良さというか、建物がとにかくそこにきちんとあることが必要なんです。それがトンコナンでないとダメなんです。簡易の建物とか、ほかの建物では意味がないんです。だから、修復をして、そこにきちんとあることが、トラジャ人にとっては幸福で安寧で繁栄でアイデンティティなんです。

柳原 住んでいるということも重要なんですか。

細田 はい。

司会 でも、単に住んでいる人だけではなくて、そのトンコナンに属するけれど、いろいろな事情でよそに住んでいる人たちにとっても、きっと

重要なんでしょうね。

柳原 そこは形式論理でより分けられることですか。つまり、住んでいることによる実益と、住んでいないのだけれども、ぼろだったのが立派になって有難さが増すという「益」。つまり、「イワシの頭も信心から」というように、ぼろであろうがありがたいからありがたいんだではなくて、立派だともっとありがたいんだという、そういう理解を当てはめていいんですか。

細田 いいです。

柳原 あ、そう。

細田 はい。

司会 何か反論があるんですか。

柳原 いや、ない。(笑)

司会 たぶんそれと同時に経済的には、そこの人たちの雇用創出みたいなものにもある程度貢献したのでは。経済援助のプロジェクトっていつもそうですね。

細田 修復するときにですね。

司会 ええ。大工さんももうかるわけだし、経済効果も若干……、たいしたお金はかからないですか。

細田 いや、ありますよ。

柳原 しかし、プロジェクトを推進した側の意図として、主たる「益」はそこではないわけですね。

細田 そうです。先ほど言った家族ですね。そしてトンコナンで、先生がおっしゃったように、とにかく1円でも多くあったらトンコナンを立派にしたいんです。それはアイデンティティだからなんです。そう思っているんです。

しかし、タマン・ミニ・インドネシア・インダーのなかのトンコナンではないんです。あれが1億かけようとも。

柳原 わかりました。

細田 修論の試験を受けているみたいですね。(笑)

柳原 久しぶりだね。(笑)

細田 久しぶりです。いつもやり合っていたんです。

柳原 繁栄，幸福，安寧に当たる言葉はあるんですか。

細田 トラジャ語ですか。あります。

柳原 ある？

細田 ただ、それをわざわざ言いません。つまり、トンコナンという言葉自体がそれを全部、含めているということですから。

柳原 しかし、細田さんがそれを表現するときのキーワードとして、この三つがこの順番で出てくる。順番も意味がありますか。

細田 順番。(笑)

司会 厳しい質問ですね。

細田 厳しい質問ですけれども、繁栄していく、そうですね。そうです。その家系が繁栄していくこと。家系の繁栄というのはいっぱいあって、子どもがたくさん生まれて、いい子どもができることもそうですし、それから、その子どもがまた次の家をつくっていくことも繁栄ですから、そうですね。

司会 「ここを直します」というふうに言ってあげたら、向こうは全員、どの家もアクセプトですか。それとも、「いや、嫌だ」とか、そういうこともあったんでしょうか。

細田 蛇が住んでいるので、今はできないと言った家はあります。

司会 それはシンボリックな蛇なんですか。

細田 そうでしたね。その意味は私もいまだに聞けませんけれども。蛇は棺桶の彫刻にも使われています。

【トンコナン修復の技術】

中島 ミナンカバウでルマ・ガダンというのがだんだんはやらなくなるのは、一つは材料が手に入らない。つまり、あれをつくるときに、ティア

ンウタマという真ん中の心柱、最低3本要るんです。その木を周りの森からもう取れない。つくりたいと思っても、昔のようなものはもうできないから、代用でコンクリートで壁を固め、その上に外見的に水牛の角をかたどったルマ・ガダン特有の形状に見える屋根をつくっていく。屋根は竹で組んでいくので、できるんですけども、トンコナンの場合はどうなんですか。

細田 トンコナンの場合には、さっき柳原先生の質問の答えでは、いい建物というのは、つまり屋根をトタンにするとかということではないんです。だから、本当にもととのオリジナルの部材でオリジナルの建物を建てるのが、彼らにとってのいい建物なんです。大工さんたちが木を切るときも山の中に入って選んで、何年の木だからこれを切るとか、そういうことからやりますから、比較的材料を使える状態が続きます。まだ大丈夫だと思います。でも20年後ぐらいはわからないです。

倉沢 修復ではなくて、建て替える、各家族、家系であまり行われていないんですか。

細田 建て直しというか、全く新しいのを建てることですか。そういうのもあります。

倉沢 やっていますか。

細田 やっています。

倉沢 その後には新しい建物を建ててしまうというのではなくて、やはりトンコナンを建てる。

細田 トンコナンを建てます。

倉沢 じゃあ、場所についても、たとえば前にトンコナンがあったその場所は再び建てるときはトンコナンを建てる。一方、若い人たちが新しい家を建てるときは別な土地で建てるという、そういうことになりますか。

細田 そうです。

倉沢 アチェみたいに地震がなかったから、わからないけれども、これは耐震性とかというような意味では、かなり強い建物なんでしょうね。

細田 そうですね。屋根が全部、竹なんですけれども、6トンぐらいです。トラジャはすごく雨は降るんですけれども、突風がないんです。

倉沢 上からの力はすごくかかるんですね。

細田 上からの力がかかるような建物にしている、下は土の中に埋め込みません。

倉沢 ぽんと置いてあるだけ？

細田 そうなんです。だから、牛の博物館が日本に持ってきて屋外に建てたいと言ったときに、それは無理だといわれました。日本は地震もあるし、台風もあるわけで、だからといって柱を下に埋めるということになると、オリジナルではなくなる。トラジャの場合はたぶん突風がないことが、大きな理由です。

中島 ミナンカバウも最近地震が多いんです。死者も出たりしていますが、柱をしっかりと地中に埋めたルマ・ガダンが壊れたというニュースは聞いたことがありません。壊れた建物には、壁をコンクリートで固めただけのインドネシア語で「ルマ・パーマネン」(永久性のある家)が多く、皮肉ですね。

倉沢 去年でしたっけ、ジョクジャカルタで地震がありましたよね。私が調査しているバントゥル県というところが一番ひどかったんです。自分が調査しているウォノレロ村というところが、ほとんど8割から9割、全部、建物が倒れてしまったんです。

直後にそこへ行きましたら、ジョクロ形式(大きな4本の柱を家の中心に正方形に立てた伝統的なジャワの建築)の昔からの建物は形をとどめているんです。すごくびっくりしました。一見、レンガづくりの近代的な建物が強そうに見えるのだけれども、あれは全部、ガラガラガラッと壊れてしまいました。それに対して、ジョクロのように柱が4本立っている建物は強いんですね。周辺が少し壊れていても、まだ、住めるんです。すごいものなんだなと思ったんです。

細田 組んでいくわけですからね。日本建築と同じですけども、全部

組んでいくから、相当強いんだと思います。

倉沢 強いんでしょうね。でも、建て替えるときにはお金もものすごくかかるんでしょうね。普通のレンガづくりの家なんかよりも、けた違いに。

細田 ものすごくかかります。先ほど部材がないと言いましたが、それこそ太い部材を山の中で全部選ぶことから始めますから。

柳原 それはどういう土地ですか。

細田 集落の共有地・家族の所有地から選ぶけれども、それがないときには地縁をたどります。そういう情報網はすごいので、ありそうだという情報があると出張して行って、そこで選んでくるんですよ。

倉沢 それは買うんですか、もらえるんですか。

細田 今は買っています。たぶん昔は全部、交換だったと思います。豚と交換したりなんですけれども、今は現金で。

司会 高いんでしょうね。

細田 でも、今は水牛の方が高いと思います。

【トラジャ族の葬儀】

司会 それでは、次にトラジャ族の葬儀に参りましょう。実は私は本のなかに出てくる番組、「死のために生きる人々」というタイトルは何かちょっと変だなと思ったのですけれども（笑）、番組の内容自体については細田さんと違って、あまり暗いという印象を持ちませんでした。

そもそも本の中にも出てきますが、トラジャ県の知事を務めたアンディロロという人のお葬式なんです。旧王族で、近代的な意味でもトップにあった人だから、すごいお葬式なんです。インドネシア全国津々浦々から甲問客が大勢くるので、そのためにそれぞれ仮の建物を建て食べ物を用意しなければいけない。それを全部、村の人がやるんですよ。

一大イベントとなります。村の人が建物を建てたりすると、ふだん食べられないごちそうを出して労をねぎらうというところがいっぱい出てきます。ブタを殺して好物のパピヨン（竹筒の中で蒸し焼きにする料理）を作

ったりとか、ヤシ酒を飲んだりとか、村の人たち全部総出で作業をしてごちそうを食べて、といったイベント自体をすごく楽しんでいるところがいっぱい出てくるんです。

確かにファミリーにとっては悲しいのかもしれないのだけれども、村の人たちにとっては、そのときにみんなで何かを成し遂げて、ご飯もおいしいものを食べられてという感じで、祭りの空間みたいになってる。そういう感じですよ。

細田 そういう感じなんです。ただ、そのテレビ番組の後にもう1回あったんです。それはとにかく「トラジャの葬式はこういうのだよ」みたいなのがずっと暗い感じで、お金を集めるのがいかにたいへんかみたいなどころばかりに焦点が当たってしまったというのがあったんです。だから、何か誤解というか、トラジャの葬式は金がかかるだけで、すごくたいへんというように見えるんです。トラジャの葬式は本当にみんなが楽しんでいるという感じで、それは私にとっては本当に驚きでした。

最初に小さい葬儀は行ったんですけれども、一番大きい、そのアンディロロ氏の葬儀に私も出たのですが、そのときは本当にみんな楽しそうで、こういう死の迎え方と死の送り方というのがあるんだなという最初の驚きがそれでした。

トラジャの葬儀というのは、行けばおいしいものが食べられるんです。何かをすれば、それなりのものが受け取れる、つまりお金でもあるし、お米でもあるし、ご飯でもあるし、豚でもある。葬儀がそういうものを供給する場でもある。そういう視点がすごく大事で、食べることがまさに中心になっていると、私は葬儀についてはそういうふうに思っているんです。

倉沢 葬儀をそういう適切なかたちというか、正しいかたちで行うことによって、ようやく死者の魂があるべきところへ戻れるみたいな、そういう考え方があるわけでしょう。

細田 まだ死者ではない。

倉沢 葬儀を行ってようやく……、バリも同じですよ。お金が集まっ

てからやる。

死の直後ではないから、その悲しみというのも少し和らいでいるだろうし、むしろ、悲しみよりもようやくその魂をあるべき姿に戻す喜びと言った方がいいかもしれませんが、そういう方が強いんじゃないかな。バリの葬儀を見ても、同じように思ったんですけども。

中島 トラジャの死者の場合は、我々の言葉でいう遺体なんですけど、サキット、つまり病気の状態と呼ばれ、これをトンコナンの中に置くんですね。においが当然出ますけれども、そのへんのところはどうですか？

倉沢 強く巻くんですか。

中島 包帯とかですか。

細田 巻くんです。ナンカという木があるんです。ジャックフルーツですね。あれを防腐剤に昔は使っていたと。

倉沢 木の皮ですか、何ですか。

細田 木の皮をくだいて粉にして、ネバネバした幹の汁とあわせて使います。でも今は使っていないそうです。ホルマリンを使っていると言っていました。

そういうところに何回も行ったのですが、日本人は、死体のそばに行くというのを結構ちゅうちょするんですよね。だけど、「おまえ、上がってこい」と言ってみせてくれる。(笑)

旦那さんが亡くなると、奥さんはずっと一緒に寝ているんです。私なんか、うーん、どうしようかなと思ったりするんですが、「いいんだから、おいで」とこっちの方でコーヒーを飲みながら、話すわけです(笑)。においは全然しないんです。

倉沢 しないんですか。

細田 はい、ホルマリンのおかげだと思います。だから、相当入れている。

中島 ホルマリンを漬けたもので巻くわけですか。

細田 だと思えますけれども、死んだ人はちゃんと見せてくれます。葬

儀前は、まだ眠っているけれども、葬儀をするときには、布で巻いたりするわけです。葬儀の前にちょっとお金持ちの人は棺桶みたいなのところに入れて、ホルマリンとか入れているんです。そういうのを「ちゃんと見なさい」と言って見せてくれたりしますから、日本とは全然違いますね。

においはしませんでした。だけど、風葬はにいましたね。

司会 その後に何か崖みたいなのところに運んでいくんですよね。それはやっぱりおうと思う。そこがおうと書いてありましたよね。

細田 それがやっぱりおう。すごく上の方に入れてしまうのはにおわないんですけれども、普通はにいます。

司会 近いところはね。体が朽ち果ててときに、二次葬みたいなのはしないんですか。骨を出してきて、洗うとか、そういうのは。

細田 南部の方はやらないと思うんですけども、北部の方はマネネというのがあって、また巻き直すんです。引っ張り出して、それを巻いて、また納めるというのがあります。

倉沢 もうだいぶミイラ化しているものですか。

細田 はい。だから、小さくなってしまいますよね。それを今度、二つにして、また巻き直す。それで普通の家というか、田園の中の、番小屋のような小屋にわーっと置いてあるんです。

倉沢 岩の穴ではなくて。

細田 岩の穴に入れているところと、それから、田園のそういう小屋に置いているところと。それで「何人ぐらい？」と聞いたら、「120だな」とか言うんです。そのなかに行って、出して、それで全部巻き直して、また納める。岩の場合はお金がかかるんです。そこまでかけられない人は、平地の田んぼの中に小屋を作って、そこに入れていました。現在は、平地にお金をかけて墓を作ることがふえました。

司会 じゃあ、遺体がずっと何代前も保存してあるわけですよね。

細田 そうでした。

司会 一族は同じ建物の中に入っているんですか。

細田 そうでした。

中島 個別認識というのはするわけですか。この骨は誰のだとか。

細田 わかっていました。たぶんそういうのは口承なんですかね。口承伝承というか、これはこうだからと言って、きっと巻きながら教えるんだと思うんですが、わかっていました。

司会 沖縄でもそういう二次葬をやりますよね。

細田 洗骨ですよ。ええ。今はやっていませんが。

司会 それとはずいぶんやり方が違うんですか。トラジャの場合は、遺体は洗ったりはしないわけですね。

細田 ええ。

【トラジャ族とキリスト教】

柳原 これは細田さんが自分で問いとして立てて答えが出たと言っているところです。信仰についての問いを自問したというのは、長くあった問いでしょうけれども、183ページからそのことを明示して問いとして立てて、185ページまでそのことの自分なりの現段階での理解を書いています。「敬虔なクリスチャンであることと土着の宗教を並存させることは矛盾しない」とありますが、敬虔なクリスチャンとは何を意味するか。

それから、それと一部重なるけれども、教理の普及という、言葉經由で入ってくるものと、トラジャの人たちの生き方というのが並存、共存していることは確かなのですね。いろいろな問いの立て方がありうるでしょう。なぜキリスト教はこれだけの存在になり得たのかというふうに問いを立てると、どういう答えがあるんですか。

細田 トラジャの場合ですか。トラジャの場合は私は最初はすごく疑問でわからなかったんです。トラジャにも神話があります。天上の神がすべて創造し支配しているということです。ミッションが入ってきたときに、なかなかトラジャの人が教会にいかないのが、教理を教えるときに、プアン・マトゥア（最高神）という言葉を使いました。だから、イエス・キリ

ストとプアン・マトゥアとが合致してクリスチャンが増えたと聞いています。

柳原 しかし、あえて言えば、キリスト教の付加価値は何だったんですか。そして、何であるんですか。

細田 キリスト教の付加価値？

柳原 キリスト教がない状態とある状態で、何が付加価値なんですか、なんて訊いたら変かな。(笑)

細田 インドネシアでは独立後に宗教を選ばなければいけなくなりました。

司会 イスラムを選ばなかったわけですね。

倉沢 トラジャ族がキリスト教を選んだのは独立よりもっと前からじゃないんですか。

細田 はい。アルク・ト・ドロという先祖のやり方を踏襲するアニミズムでした。そこにミッションが入ってきました。この段階で全部がキリスト教になっているわけじゃないんです。それが宗教を選ぶとなったときに、やっぱり多くのトラジャの人々はキリスト教を選んで、さらにその教理と結び付くことになった。

柳原 その選ぶというところ、今の全体像としてトラジャ族の85%でしたか。

細田 クリスチャンですね。

柳原 2段階の問いがあって、第1段階はなぜトラジャ族はキリスト教を選んだか。次の段階は85対15ですね。それに対する答えは。

細田 85%がクリスチャンになったのは、簡単な言い方をしてしまえば、それはトラジャの儀式などを守るためでしょうね。選択肢はやっぱり儀式です。自分たちの生活の基ですから。

柳原 いや、キリスト教を選ぶか、イスラムを選ぶかという選択を中央政府によって……。

細田 イスラムは入っていたんです。ブギスがイスラムですから。

倉沢 オランダ時代にどのくらいの人ですでに明確にクリスチャンになっていたんですか。つまり、いろいろ混合した状態であってもいいけれども、洗礼を受けてというような意味で、信仰告白をして入信したというようなかたちを取った人はどのくらいいたんですか。

細田 オランダが入ってきたのはだいたい1905年なので、そんなに新しくないんです。それからミッションが何回か布教したけれども、最初はそれこそ人口の15%いないぐらいだったと思うんです。

倉沢 あとの人たちはほとんど独立後のパンチャシラのもとで、何らかの宗教のうちの一つを選ばなければいけないとなったときに入信したものなんですか。

細田 ええ。それとやっぱりみんなが、たとえばイスラム教はどういう宗教かみたいな情報は入ってくるわけです。そうすると、豚は食べられない、豚は殺せないみたいなことになっていく。

司会 そういうことが大きい？

細田 そうすると自分たちの儀式にとって、生活にとって一番重要なのは豚ですから、だから、そういうもので考えたら、それはやっぱり宗教を選べといわれてクリスチャンを選ぶということですよ。

柳原 パンチャシラゆえ。

倉沢 何らかの信仰を持たないといけないという規則は確かにあります。

柳原 パンチャシラゆえに、だけど、敬虔になってしまった。きっかけは何であれ。

倉沢 統計上だけの、つまり名だけのクリスチャンというのもあるのでしょうけれども、でもやっぱりその場合でも敬虔なんですか。

細田 そうですね。だから、自分を助けてくれた人に対してはすごく感謝をするみたいな、日常的にそういうのがすごくあるので、だから、この食べ物を食べるのは神様のおかげであるといった感謝をささげる。それが一つのかたちだと思います。

司会 私の見た葬儀の番組だと、キリスト教的な儀式というのは、墓を掘り起こしたりするところであってのだけれども、あとはほとんどないんですね。普通、私の知っているサモア人はサモア的な儀式もするのだけれども、キリスト教の儀礼というのがすごく重要で、それと比べると、敬虔なのかなという気はしますがね。

細田 敬虔なというのは、たとえば日曜日には必ずミサにいくとか、結婚式のときは必ず神父様に来てもらってアーメンを唱えるとか、何かのことがあつたらそうなんです。毎日食事をする前に必ずみんな集まって、アーメンをするとか、それから私が行くと、私が来たことに感謝してくれるとか、そういうことについては敬虔なクリスチャンかなと思うんです。何につけても今の状態を感謝するのです。

司会 じゃあ、儀式にはあまりキリスト教的なのは入っていないんですか。

細田 儀式にはほとんど入れないです。だけど、棺桶には十字を入れたりとか、そういうことはあります。

司会 でも、キリスト教式に土に埋めるというのはしないわけですよね。

細田 そういう意味でいったら「敬虔」ではありませんね。

司会 いや、いや、そんなことはないですけども（笑）、どの部分が融合しているかというのは面白いなと思います。

細田 だから、土に埋めないで風葬だけれども、自分は本当にクリスチャンだということを示すために棺桶に十字をしたりとか、それから、お墓の前にちょっと十字を立てて置くとか、そういうことはやります。

司会 カトリックなんですね。

細田 いや、プロテスタントが多いですが、カトリックもいます。

司会 聖職者は現地人ですか。

細田 そうです。現地人か、あとはスラウェシの人です。

倉沢 北部スラウェシの人ですか？

細田 北部の人とか、トラジャ人ですね。

中島 それはローマとの関係はどうなんですか。カトリックの場合ですが。

司会 カトリックはみんな中央集権だから、あるレベルの教会のトップというのがインドネシアにもいるわけだし、ビショップとか、そういうのではないのでしょうか。

中島 関係はあるんでしょうね。

司会 ないわけではないと思いますが。ほかにインドネシアのなかでクリスチャンのところというのは。

倉沢 いくつかあります。

細田 マナドとか、やっぱりスラウェシが多いんです。それから、フローレスとか。

司会 そういえばフローレスはクリスチャンですね。

中島 マルクがそうですね。それからバタックがそうです。

司会 そうというのは全部、どこか中央で管理しているところがあるはずですよ。

中島 インドネシア・キリスト教教会。

倉沢 教団がありますね。トラジャはどうなっているんですか。

細田 そこに入っています。そのトラジャ支部だと思います。

倉沢 北スマトラなら北スマトラだけの組織もありますよね。

細田 ゲラジャ・トラジャ（トラジャ教会）というのがあります。

倉沢 それはどこの支部に所属しているんですか。

細田 スラウェシだと思うんですけども、調べてみます。

司会 それでその上部がたぶんジャカルタにあるんでしょうね。

柳原 言葉にこだわると、キリスト教の教理をトラジャ語で書くときに、もともとの言葉でなんとかできたのかどうか。

司会 教理というか、聖書ですよ。

柳原 だから、オランダ人が来たということは、オランダ語版がまずある。

倉沢 布教したときには何語の聖書を使ったんでしょうか？

中島 それは現地語もありますね。布教のために宣教師がトラジャ語の研究をしたに違いありません。

細田 宣教師が現地語を使ったのです。

柳原 現地語といってももともとあった言葉という意味合いと、インドネシア語のように何でもインドネシア語風に語尾だけしてしまうというやり方とがあるわけで、そこは興味津々ですね。

細田 トラジャ語の辞書をオランダから来たプロテスタントの宣教師が残していますから。それはそれを作らないと布教ができないということで、全部、作ったということではないのでしょうか。現地語というか、インドネシア語ではなくて、トラジャ語です。

司会 プロテスタントの場合、布教の最初にとりくむことのひとつが聖書の現地語訳なんです。聖職者になる人はともかくとして、現地の人には現地語で教えます。基本のターム、例えば神様だとか天使だとか、何だとかというのを、やっぱり現地にある概念におきかえるようにするけど、ない概念、複数ある概念とかあるわけですよ。それをどういうふうにするかというのはすごく大きな問題で、布教がどのくらい広がるかということとも大きくかかわってくるわけですよ。カトリックの場合、けっこう最近までラテン語の礼拝にこだわっていた。でもやはり布教は現地語でしょう。

倉沢 オランダ時代、当然、オランダ人の宣教師が来ていて、彼らはそういう、今までどおりのトラジャの祭礼をそのまま認めたということなんですか。

細田 いや、水牛を殺すことについてはものすごく反対だったんです。それで葬儀のときも水牛を殺すし、祝祭のときも水牛を殺していたということがあって、オランダ側は、とにかくそれを禁止しようと思いました。水牛を殺すことについてはものすごい反発があった。

倉沢 どうして水牛はいけないんですか。

細田 やっぱり血を流すということで。祝祭で殺生をするということ。

倉沢 でも、キリスト教も……。

細田 そういうことはしますね。でもそういうふうに聞いています。

倉沢 水牛がいけないのかな。

司会 いや、殺すこと自体はいいんじゃないんですか。公衆の面前でああいう、ちょっとショー的にやるというのがたぶんいけないんじゃないか。

細田 儀式として血を流すということがいけないんじゃないですか。

倉沢 でも、生贄というのはキリスト教の思想にありますよね。

細田 ありますね。

中島 首狩りについては「やるな」と厳しく言っているはずですね。

細田 葬儀についても、だから、とにかくそういう儀式的なかでそんなにたくさんの水牛を殺すことについて、最初は反対したと聞いています。それで禁止しようとしたら、トラジャ人の抵抗があまりに激しくて、それで身の危険を感じるぐらいだったそうです。なので、どこかで妥協しなければいけないということで、葬儀のときは水牛を殺していいけれども、祝祭のときは殺すなと。だから、いま祝祭のときは水牛殺していないです。そういうところでの現地の文化との妥協があります。

司会 コンフリクトがあったんですね。

細田 こういう妥協点をどこで見つけたんだと思うんです。

倉沢 それでもキリスト教に入る人たちのメリットは何だったんですか。

細田 それはたぶんみな、マナドなんかと同じで、最初の教育を学校でちゃんと読み書きというか、そういうものを優先して教えてくれるとか、それから何か病気になったときに、そこに行けばちゃんと治療してくれる



柳原透氏と細田亜津子氏

とか、そういうことですよ。そういうのがどんどん広がっていったということだと思うんです。

司会 だんだんわかってきた。たぶん、そうするとキリスト教の聖職者の方で避けているのかもしれませんが。あまりお葬式に首を突っ込んでいくと、水牛の首を切ったりなんかするところとかかわっていかないといけないから。

柳原 それはそうですね。営業上ね。

司会 むしろ、そこは妥協して身を引いているというところがきっとあるんでしょうね。

中島 キリスト教の布教については、南のブギスがイスラムであることは関係はないんですか。

細田 あります。

中島 いや、オランダにとって、ブギスとかスラウェシを治めるために、ブギスはイスラムが強いから、対抗勢力として、トラジャにはキリスト教を優先的に伝えようと。それはマルクがそうですね。あそこはイスラムとキリスト教がいます。

柳原 そうなんですか。分割して統治せよ、ですね。

中島 そういう一種の傭兵を使うために、マルクの人たちをキリスト教にして、彼らを優先するんです。それが現在のマルク紛争の根本的な原因になるのです。

司会 逆にトラジャの人の方もブギスにもし対抗心があるのであれば、違う宗教を選ぶということはあると思うんですけども、どうなのでしょう。

細田 それは潜在的にあるでしょう。

中島 オランダ時代にトラジャが優先されていたということはないんですか。

細田 布教の方ですか。

倉沢 優遇されていた、というようなことは？

中島 たとえばオランダ軍に傭兵として雇うということです。

倉沢 マナド人とアンボン人みたいな感じで。

細田 オランダが優先したのはブギスの方なんじゃないですか。だから、ブギスの商人がどんどん入ってくるとか、それから、トラジャのなかの集落の長が武器と交換していくとかありますよね。そういうことがあってトラジャの人はブギスに対しては全体的な警戒心を持っているんです。だからブギスの人たちがイスラムだというのがわかったときに、ある意味ではそれはブギスのイスラムにはならないという宣言もなかではでてくる。ブギスのようにイスラムだったら問題はやっぱり中心は豚ですよ。儀式としてのそういうものを自分たちは守るところでは、ここで線を引きます。

いろいろな要素がたぶん重なって、それでキリスト教を受け入れているんだと思うんです。だから、一番自分たちが伝統的にやってきたものを核にして生活を守っていくとか、維持していくためのさまざまな要素を取り入れた場合の妥協点がクリスチャンというか、キリスト教だったのかなと思います。

【観光と開発】

司会 次のテーマに入りたいと思います。観光と開発について議論したいと思います。

細田さんは開発経済学という視点でもたぶんトラジャのことを考えておられると思うんですが、どんな可能性があるんでしょう。それともまだ開発はそれほど進んでいない？

細田 倉沢先生がいらしたときに比べたら、雲泥の差なのではないかなと思います（笑）。私が一番最初にトラジャに行ったときは1990年だったのですが、そのときも本当にすごい道でした。95年ぐらいになってから、全アスファルトみたいになってきたりして、それから、大規模開発でホテルが建つという、そういう状況だったので。

司会 それは経済危機の後ですか。

倉沢 前です。経済危機でつぶれちゃうんですね。

司会 その前にじゃあ、インドネシアのバブルみたいな時期に。

細田 ただ、スラウェシのプロジェクトはあったと思います。トラジャの手前まではアスファルト道路があったけれども、トラジャに入ると砂利道というか、ひどい道というのが90年の最初だったんです。インドネシアが観光開発の目玉をバリとトラジャに決めた後に次第に舗装されて、ホテルが建つとかという状況になっていったという感じでした。

司会 じゃあ、今はホテルなんかも結構あるんですね。どのくらい観光客は来るんですか。

細田 年間5万人ぐらい。ただ、テロの後はほとんど来なかったです。

司会 バリ島のテロのことですね。

細田 ニューヨークのテロの後も。

中島 9.11以降ですか。

司会 バリもあまり来ていないのですか？

中島 バリのテロは2002年にあったので、それでがたっと2割ぐらいに落ちてしまいました。最近はかなり回復してきてはいるんですけどもトラジャではどうですか。

細田 回復してきたのだけれども、やっぱりまだトラジャまではそんなに来ないというか、そういうのはあります。

倉沢 足が不便ですよ。たとえば日本から行く場合も、バリだと直行便を使えば6時間くらいで行けるけれども、トラジャですとバリないしジャカルタに着いてからマカッサルまで飛んで、そこから遠路1日かかって行くわけですから、よほど決意がないといけませんよね。それでも5万人。5万人というのは海外の人ですか。

細田 いや、国内も入れてです。

中島 たいした数じゃないですよ。現在で5万人ですか。

細田 それもピークのときです。今はずっと下がっています。ホテルも

急激に五つ星にしたんです。ジャカルタの資本が入ってきた。でもその五つ星ホテルがいま成り立たないので、売却したりとか。

倉沢 売却された建物はどうなっているんですか。

細田 建物はほかのホテルが買い取っています。

倉沢 ホテルとしては続いているんですか。

細田 フランス資本のホテルとかは、フランス人があまり来なくなってしまうて、だから、ジャカルタの資本が買って、今度は国内の旅行者を少しずつ入れるようにしているのです。五つ星のホテルは二つ倒れています。ちょうど90年から数年のときにスラウェシは危険だと言われ始めて、イスラム教とキリスト教の戦いというか、テロがマカッサルもあったりして、そういうのが全部重なったので。

倉沢 それは98年以降の話ですね。

細田 ですから、そんなことで観光客は減りました。

中島 ポソはどのへんになるんですか。

倉沢 少し北の方です。

司会 ここで事件があったんですか。

倉沢 キリスト教徒とイスラム教徒のコンフリクトがあって。

細田 ポソはちょうどこのへんです。

中島 そこにポソ湖という湖があるんですよ。

細田 そうです。北スラウェシは日本軍が全部入ってきましたよね。ここまでトラジャまで。あ、ごめんなさい。マナドだから、こっちです。

司会 日本軍が入ったのが。

細田 いえ、いえ、ポソ。

倉沢 日本軍はトラジャにも来ていますよね。

細田 来ています。中央スラウェシなので。

司会 でも、トラジャについては観光開発の目玉として政府の働きかけがいちばんあったわけですよ。国のサポートでいろいろな観光開発とか、インドネシアの観光局みたいなのもオフィスを持っていますか。

細田 それはないです。もしオフィスを持っていたても、スラウェシ州都のマカッサルとか。だから、観光客は来るけれども、そういう拠点となる観光省とか、そういうのはなかったのです。

司会 そうですか。

細田 そういう時期に私がちょうど行っていたので、観光客が来るということでホテルが建ち、雇用が増えるということは見えていました。だけど、トラジャの人たちは観光客が来ても来なくても、自分たちの生活はたいして変わらないと言っていました。

変わるとしたら、観光客の落とした利益でまた葬儀で水牛が1頭よけいに殺せると。それから、たとえば念願だったトンコナンを建てることができるとか、そういうことを考えているので、もしそれがなくても別に、観光客が来なかったら来なくても、たいしたことはないというような生活のしかたでした。

だから、今は観光客が減ったからといって、バリ島のように困っていないというか、そういうのがあります。

柳原 地元と漠然といいますけれども、どう発展していくとかかそういう発想で地元の人が何かをすることがあるんですか。

細田 トラジャの人がですか。

柳原 かたちでいえば県というのがあり、その下に行政区画があり、そういうレベルではおそらく必ず開発計画なるものは作るんですよね。それとは別に細田さんが見ているような意味での人々自身の構想とでも言えるものがあるんですか。

細田 開発のなかで、自分たちに一番いいことと一番やりたいことというふうに明確に彼らが語ってくれたのは教育でした。学校に行かせたいと。それと、たとえば大学だったら、本当に大学を最後まで卒業させたいとか、そういうことにお金を使いたいというのはよく言っていました。

柳原 それと行政側が策定する開発方針とかというのは……。

細田 ありました。

柳原 全く無関係にあるんですか。

細田 たぶん県には国の計画が下りてきて、県としてもきちんと何かつくるんですよ。それを各郡に回していきます。けれども、郡として、自分たちから主体的にとりくむということでは聞きませんでした。

柳原 これについて、ポスト・スハルトの時期は見ていると言っていいんですか。

細田 そうです。

柳原 でも、建前としては、そこで変わるわけですよ。

細田 そのとき変わったのは、スハルトに独占されていたものが市場経済で自由になったので、自分たちで一生懸命作れば売れるようになったことですよね。換金作物として、丁子とかコーヒーも以前は全部安値で買い上げられていたのだけれども、今では自分たちで市場に出せば、それにみあうお金が返ってくると現実になって、彼らはすごく喜んでいました。

それで自分たちでどんどん、たとえば丁子の木を植えたり、コーヒーの木を植えたりして、市場に出しているということはスハルトの後に急に起こりました。

司会 基本的に現地は農業なんですか。

細田 はい、そうです。農業です。

司会 それで、そのサブシステムの部分があって、お米とイモと。

細田 そうです。ヤマイモとか、ジャガイモとか。

中島 キャッサバもそうですね。

司会 あと、コーヒーとか、そういうのを換金作物として作って。

細田 はい。ただ、換金作物を作っても、スハルトのときはスハルト系列が全部、入ってきて買い上げていました。その部分が開放になって、いろいろな業者が入ってきて、そこで自由に売れるというようになったのは確かです。

柳原 開発というとき、個々の農家がそういうことをしているということを超えた、もう1段大きな集団として何かを目指す、というような言い

方はできるんですか。

細田 ないですね。

柳原 行政のほうは何か働きかけをしているんですか。

細田 ちょうど観光開発が入ってきたときの知事は、観光客を呼び込で、そしてマカレとかランテパオ以外のところにも行くようなルートを作ったりしました。だけど、それを歓迎して、自分たちで観光客を迎えようとかという気はほとんどなかった気がします。だから、郡は郡で「こういうことをやろうよ」みたいな積極的なことはあまり見なかった気がします。

【インドネシア政治の流れの中での変容】

倉沢 スハルトの開発独裁期を通じて、トラジャの社会はそれ以前とどういうふうに変わりましたか。

細田 私が行っていたときには、観光開発で道路がちゃんと整備されました。道路までの小さいアクセスの道もできるようになった。これは県がやってましたが、少しずつ整ってくると、やっぱり具体的には一見きれいになる。つまり、ゴミがなくなったりとか、道路脇に花が植えられたりとか、そういうことはすごくよく見えるようになりました。

倉沢 独裁期の村落社会に対する干渉とか、村落社会の変容とか、そういう点ではどうですか。

細田 若者が出稼ぎに出ていくとか、さっき言った北部の若者はランテパオとかマカレの方に働きに出てくるといった現象はありました。

倉沢 それはどちらかというと、民の方からの動きですね。

細田 はい。

倉沢 中央政府によってどういう政策が実行されて、どういったふうにもコミュニティが変容していったのかということに興味があるんですけども。

細田 コミュニティが変容していったということについては、インフラが充実してきたことです。道路ができたというのは一番大きくて、それに

よって若者が出ていったということがあります。たとえばバリ島とかジャカルタに出稼ぎに出ていってしまうということで、コミュニティとしたら、若者が少なくなってくるというか、過疎化まではいかないけれども、やっぱり子供と老人が増えてくるという現象は前に比べて増えてきました。

倉沢 それもそうなんですが、一般にいわれているのは、スハルト政権は多様な民族を画一化していく、ユニフィケーションというのでしょうか、制度的に画一化していった、本来、伝統的にあったアダットに基づくコミュニティを、アダットを捨てさせて、国家が定めた統一的な原型にみんな従わせるといような政策をしていますよね。

そういうのがジャワなんかではすごくはっきり出てきているのですが、トラジャではどうだったのかなという質問なんです。

細田 たぶんそれは政策として入ってきたと思うんです。

倉沢 入っていますか。

細田 入ってきたと思うのですが、それはトラジャのなかではジャワなどに比べると浸透していなかったのではないのでしょうか。

倉沢 していない？

細田 はい、していないと思います。

倉沢 たとえば「むら」とか「村長」とかを意味する言葉一つとっても、スハルト政権以前に使われていた言葉と、スハルト期に使われた言葉はどうですか。変わっていませんか。

細田 それは変わってないですよ。

倉沢 そうなんですか。

中島 いや、倉沢さんの質問はこうです。1979年に村落法というのができて、インドネシアの末端の行政機構をデサというジャワの村をモデルとして、ほかの民族集団地方での行政機構を統一化しました。たとえばミンカバウの場合にはナガリという共同体があったのを、それは平均5000人ぐらいの人口があったから、四つとか五つとか、そういう村に分けました。それで村長を投票というかたちで選ばせたのですが、実際に選ばれてきた

人たちは、たとえば元公務員とか元軍人とかという、政府に直接つながっていくような人たちが村長さんになっていったわけです。そうすると、ナガリのなかの伝統的なリーダーシップというものは完全に……。

倉沢 変容してしまうんですね。

中島 脇に置かれて、中央集権的な体系ができていったんですよ。トラジャの場合、どうだったかということですね。

細田 そういうものは全部入ってきていると思うんですが、トラジャの場合は村長になるのは地縁の人、やっぱりもともとこの村の人が村長になることが多いんです。

倉沢 それは多かれ少なかれどこも同じでしょう。

細田 今も。

倉沢 地元の人なのだけれども、政府系とかゴルカル（スハルト時代政権を担っていた政治団体）系の人ではないですか？

細田 政府系ばかりではないです。元の酋長、何といたらいいのか、その地域の有力者とか、そういう人がなっています。

倉沢 そういう人たちは全然ゴルカルやゴルカル寄りでなくてもやっていけたということですか。

細田 やっていったんでしょうね。

倉沢 つまり自分たちのリーダー？

細田 それが最近はその上に郡長がきますよね。チャマットは全部、村とは関係ない人が入ってきている。

中島 それは任命ですね。

細田 はい、任命で。それから村長も最近はそのようなかたちではなくて、たとえば地方公務員とかがどんどんなったりという、ごく最近はそのような傾向になっていますが。

倉沢 ポスト・スハルト期にそれが出てきているということですか。

細田 はい。だから、制度としては村長が入ってきたりとか、そのときに入ってきていますけれども、やっぱりそこではもともとそこで有力だっ

た人とかが村長になっていたりしていますけれども、違いますかね。

中島 他ではね、もともと有力だったという人は、まず政府、ゴルカル寄りでないとなとえ選挙で選ばれても・・・。

倉沢 やっていけない。

中島 たとえば村人の選挙で選ばれても、上級の官庁の承認がえられない場合には、辞めざるを得なかったんです。

細田 トラジャはゴルカルも強いのですが、ゴルカル以外の政党もかなり強かったのだ。

倉沢 どこが強かったんですか。

中島 PDI（インドネシア民主党）。

細田 あと、メガワティの。

倉沢 PDIですよ、当然、イスラム系のPPP（開発統一党）ではありえないでしょうから。

細田 はい。

倉沢 強いというのは、どのくらい強かったんですか。

細田 でも、やっぱりゴルカルの方が多いですが、ゴルカルは40%くらい、PDIは20%くらい、デモクラットは10%くらいだったと思います。

倉沢 だいたい全国平均ですね。

細田 ただ、抵抗勢力というか、かなり主張していたような気がしますから。

倉沢 それはかなり独自のものをキープし続けることができたということですか。

細田 ちょっとわからないですね。

倉沢 そうですか。

中島 それは1999年に地方自治法ができて。

倉沢 また変わるんですよ。

中島 そのへんはどうですか。

細田 その後は制度的に郡長が全部入ってきたりということではなくて

ですか。

倉沢 その前は郡長が入っていなかったんですか？

細田 ありましたけれども、もっと、「全くあの知らない」みたいな郡長が入ってくるというのがあるんです。

中島 それは任命だから、いろいろあり得るわけですが。

倉沢 でも、スハルト時代も郡長は任命ですよ。

細田 だけど、トラジャは何となくその地域と関係あるような人が来てたりとかというのはありました。

司会 トラジャ人だったりするわけですか。

細田 そうです。トラジャ人でその地域出身の人とか、そういう人がいましたけれども。

倉沢 今はそうではなくなっているということですか。

細田 今はそうではなくなっている。県知事もそうではなくなっている。前知事のタルシス・コドラット氏は軍出身でトラジャ人ではありませんでした。ただしクリスチャンでした。

倉沢 細田さんのご本にはそう書いてありましたね。

細田 でも、県知事はいま、やっぱりジャカルタに住んでいた元法律家のトラジャ人に戻っています。

倉沢 定番で教科書どおりにいうと、インドネシアではずっと中央集権化が進められていたが、99年、2000年から地方分権化が進んだ、ということになっているのだけれども、あまりそういうお手本どおりのパターンではないということですか。トラジャは定番ではない。

細田 ただ、制度としては普通に入ってきていると思うんですけども、ちょっとわからないです。

司会 でも、ジャワとは様子が違うみたいですね。

倉沢 だいぶ違います。私も西スラウェシで調査したときに違いは感じました。でも、やっぱりスハルト時代の中央集権化、それからそのあとで地方分権化というのははっきり見えるんです。ポレワリのあたりでは。

細田 ちょっとわからないですね。また、調べてみますけれども。

【開発と社会変容】

倉沢 そうすると開発政権で、インフラが整ったとか、そういうことだけではなくて、開発体制によって、社会がどう変わったかというところという、そんなに大きい変化はなかったと見ていいんですか。

細田 私なんかがすごく感じるのは、開発が入ってきたということで、逆にトラジャ人意識が強くなったとか、それから観光客が入ってくるとか、そういうことによって、トラジャのアイデンティティがよけい強くなったことは言えると思います。インドネシア人の意識がすごく強くなって、どんどん外に出ていって、そういう企業で働くとかというような傾向が強くなったということはあまりないんです。若者が出ていっても、やっぱり帰ってくるとか。

司会 若者は帰ってくるんですか。

細田 帰ってきますね。

倉沢 帰ってくるというのはお祭りで帰るのではなくて、最終的に戻ってきてしまう？

司会 Uターンみたいな。

細田 お祭りに帰ってくる人もいるし、Uターンしてくる人もいます。マレーシアの方に出稼ぎに行って。

倉沢 それは一時的にですね。

細田 出稼ぎに行ったり移住してしまっても、また帰ってくる人がいました。

倉沢 最後、老後はトラジャの地でという感じなんですか。

細田 そういう人の方が多いと思うんですけども、ただ、中央スラウェシのポソの方ではそういうことではない人もいました。違う人もいましたから、これから少しずつ変わっていくのかなと思います。

【観光開発の効果】

司会 だいたいにおいて、開発が進むと伝統文化はだんだん切り捨てられていくというふうなことはよく言われている。

中島 そうなの？

司会 そうならないようなオルタナティブはないかという、いろいろな議論があったりとか、観光開発というのは一つのそのオルタナティブではないかと言われたりもします。そのへんは、トラジャの観光開発のあり方というのもあると思うんですけども、いかがでしょうか。

観光開発は本当の開発になっていないというような議論もあって、たとえば外国資本が入ってきて、もうけのほとんどは外に吸い上げられてしまうとか、それから、現地生産の食材では、観光客相手に食べさせるものをうまく作れなかったりして、結局、どこから輸入しなくてはならないから、その分はお金が出ていってしまうわけですね。現地に思ったほどお金が落ちないというような議論が昔からあるわけです。

トラジャの観光開発の場合には、先ほどの話だと、いまちょっとまたダウンしているので、これからどうになってしまうのか、難しいと思うのですが、ホテルなどは外資というか、インドネシア資本かもしれないけれども、トラジャにとっては外来のものなんですよ。

細田 そうです。トラジャの外のものです。いま観光客がすごく少なくなって、多少スペインから来たりとか、イタリア人が来ています。それもトラジャにわざわざアクセスして、インターネットでアクセスしてくるとか、そういうことではなくて、トラジャでも、大きなジャカルタにある資本の系列のトラジャのホテルに来ることは確かです。

司会 トラジャ人自身の観光開発というのはあるんですか。

細田 ここのなかに書いたミシリアナホテルというのはトラジャ人経営のホテルです。今は、宿泊する人が減少しています。ドイツ人、フランス人などが昔泊まったからともう一度来ると、口コミで来ます。団体でジャワから来るというのはいないです。

中島 インドネシアはASEAN観光年ということで1991年にVisit Indonesia Yearというキャンペーンをして、そのときにバリとトラジャを大々的に売り出したんですよね。

細田 そうです。

中島 実際には最大で5万人ぐらいでしかなかったということは、ぼくらが外から見ているよりはトラジャにインパクトはあまり及ばさなかったということになるんですかね。バリはそれで大きく国際的な観光地として名前があがっていったわけですが、それに伴って、また、いろいろな問題が起きてきましたよね。

司会 たぶんトラジャの場合に観光客が減ってもデメリットはないんですよ。だって、ホテルは全部外資というか、外の資本だから。メイドさんの職は若干ないかもしれないけれども、それもまたサブシステムに戻ってしまえば。

細田 そうなんです。

柳原 彫刻師の話が、観光が伝統文化にマイナスではなくてプラスに働いた、という位置付けで書いているところがありますよね。しかもこの場合には、訪問客は減ってもかまわない。この本の表紙の柄がそうなんですかね、トラジャパターンというデザインで、トラジャに來ない人にも製品の販路はできているということで、インドネシアへの観光客の需要にこたえるかたちで継続、そして発展していくという、そういうシナリオが書けそうなんですか。

細田 彫刻に関しては、製品が芸術品になってきたということなんです。図柄は一つずつ意味があるんですけども、その形をただ彫ればいいというものではなくて、非常にきれいにバランスよく彫っていけば売れるというのがわかった。それから、人と競うことで自分の作品をもっとうまくしていくということが出てきたので、よけい習熟度が増して芸術的になってくるといえるんです。

これは買いに來る人がいるんです。たとえばトラジャで売れなくても、

バリでは売れます。そういうところの販路を通じて彫刻や織物とか出ます。そういうものはプラスに働いたのかなと思います。

【観光開発とアイデンティティ】

柳原 最後の章のタイトルで、少数民族という言葉は細田さんは使っています。この少数民族という特徴付けは、トラジャを外から理解するうえで、あるいはトラジャ人が自らを見るうえで、どういう意義があることなんでしょうか。

細田 トラジャの人にとっては自分たちが少数民族と言われようが、言われまいが、あまり関係ないと思います。インドネシアというのは2億人を超しているわけだから、そのなかで見たら、圧倒的に数としても少数であるし、そのアイデンティティの持ち方なんかも少数民族とっていいと思うんです。

柳原 でも、アイデンティティの問題というのは当事者が……。

細田 ずっとトラジャの人たちの歴史性とか、それから自分たちがつくってきたトンコナンの文化とか、精神性とか、そういうことすべてを考えても、トラジャ的なものというのが全部あると思うんです。それがインドネシアという大国から考えたら、やっぱり少数民族ということになるのかなと私は思ったんです。

柳原 それは客観視するとそうだということなのだけれども、当事者にとっての意味というのはもう少し何かとらえようがあるんじゃないのかなと思う。非常にあっさりとして、自らをインドネシア人ではなくトラジャ人としてとらえている、と書いているところがありますよね。

細田 はい。

柳原 でも、そうあっさり自意識を持っているのかな、と疑問をもつところですけどもね。

細田 会話をしているときに、トラジャ人というと、若者は「いや、インドネシア人として」というふうに言い直す人も最近はいるんです。だか

ら、傾向は変わってきているのかもしれない。インドネシア人としてという、インドネシア人のなかのトラジャ人というような、そういう意識に変わってきているのかもしれないけれども、いま生きている親と祖父母世代の人たちはトラジャ人という意識の方が強いです。そういうのはあります。

だから、その少数民族ですかね。

柳原 では、トラジャ人というときに、必ずしもインドネシアのなかの少数民族である我々ということではなく、単にトラジャ人ということなんですね。

細田 そうなんです。彼らは自分たちをインドネシア人といっているんだけど、必ずトラジャ人だということから発言しているというのは、いつも感じます。

司会 そうすると細田さんはトンコナンの補修というか、トンコナン保存プロジェクトの文脈でいうと、これを何か観光開発に役立てるとか、そういう発想は全然ないんですか。

細田 ほとんどなかったですね。

司会 細田さんにもないし、現地の人たちにもない。

細田 現地の人たちは全くないです。全くなかった。だけど、トラジャ県は、すぐ気づいた。外国から来て修復をやっているときれいになった後に観光スポットにしようと考えたのです。例えば、観光村か何かの立て札を立てたりして。

司会 なかを1時間見せてくれるとか。

細田 トラジャの伝統的な建物は、そこに行けば見られるみたいな、そういうルートを県の方がつくってしまったというのがあるんです。

倉沢 博物館化するという。

細田 そうです。だけど、現実にそんなにたくさんの人は行きませんよね。

中島 お葬式を見せるということはないんですか。

細田 お葬式は見るのは自由なんです。

倉沢 行ったときに「いついつ、こういうものがあります」みたいな情報はあるんですか？

細田 それはあります。大手の観光会社がトラジャと連絡し合って、トラジャというか、マカッサルですよ。そこにまた支店があるから、そこでいつ大きい葬儀があるとか情報を流します。小さい葬儀は現地に行って、葬儀に行けばラッキー。大きい葬儀があるといって、ツアー客を集める。それはあります。それは90年からありました。

司会 テレビのお葬式にも観光客の姿が見えます。

細田 その前からあります。

司会 たとえばエコツアーみたいなのでトンコナンに泊めてあげるとか、そういうのがすごく好きな人も、そんなに大勢はいないかもしれないけれどもいますよね。

中島 死体と一緒に泊まるの？（笑）

司会 死体と一緒にじゃないけれども、「ここに死体があったことがあります」みたいな、「ここが死体を置く場所です」みたいな。

倉沢 そういうホームステイみたいなのをする人はいないんですか。

細田 それはもうあります。

倉沢 あるんですか。

細田 あるんです。山の中に泊まって、3泊ぐらいして、それでトラジャを回ってくるとか。

倉沢 トンコナンに泊めてもらう。ヨーロッパ人が好きそうですね。

細田 ヨーロッパからはバックパッカーが来ますけれども。

司会 普通の観光客は行かないだろうけど、好きな人はいそう。

細田 そういう意味でのエコツアーの人は昔からありました。これは消えないと思うんです。いわゆる大型の観光開発は浮き沈みがあって。

司会 そうですよ。

細田 エコツアーは昔から入っていますから、だから、山の中に行かないと見られない、赤ちゃんを埋め込む木とか。

司会 赤ちゃんを入れちゃうの？

倉沢 寝かせるために？

細田 歯が生える前の子供が死んだら、そこに埋葬します。死んだ場合です。そういうのはトレッキングしないと行けないようなところなので、大変です。それはトンコナンに泊まって行くんです。

前もって泊まるということを決めておかなくても、時間に合わせて行ったら泊めてくれるから。村長の家に泊まることもできます。

中島 そういうのを営業している主体はトラジャの人なんですよ。

細田 そうですね。それとトラジャの人たちはガイドで雇われるぐらいです。

中島 ガイドで雇われるということは？

細田 ほかの人はトラジャの地を知らないんです。だから、一緒にトレッキングに行ってもらおうとかということです。

【インドネシアの魅力】

司会 じゃあ、観光開発の話はそのくらいにして、最後にインドネシアの魅力について語ってください。私のフィールドであるオセアニアというのはすごく広いんですが、オセアニアに匹敵するくらいインドネシアは凝縮して、文化的なバラエティもあるし、宗教もまたいろいろあるし、人類学者にとっては垂涎もののようなところだなと思っているんですけども、いかがでしょうか。インドネシアの魅力ですね。ぜひ。(笑)

柳原 人類学者というのは、まずインドネシアという線引きをするんですか。人類学者としてもするんですか。

倉沢 もっとエスニックごとに見る、というのではなくて、ですか。

柳原 つまりインドネシアという線引きは政治の線引きですよ。

司会 そうですね。

柳原 でも、人類学者はそんなものを気にするんですか。

司会 それはだって、調査許可を得たりとか(笑)、どこかの大学にアフ

ィリエイトしたりとか、そういうことを考えると我々も国単位でアプローチするんですよ。また、習っていくべき言語とかもあります。

柳原 プラグマティックに手続き上。

司会 そうです。

柳原 しかし、研究対象のとらえ方としてするんですか。

倉沢 人類学は違うんでしょうね。ミナンカバウとか、ジャワとかいう単位で考えるのでしょうか？

中島 研究対象として、たとえばトラジャとかミナンカバウとか、それはやりますけれども、でも、現在の国民国家の枠組みのなかの問題として考えていく場合には、当然、国単位ということは人類学者であれ、考えます。

たとえばインドネシアの観光開発とか、あるいは行政のシステムの変化が各民族集団にどのような影響を与えているかとかというような問題が出てくるわけですから、それは当然ありますよね。

柳原 すみません。魅力の話をするときに人類学者の話をしなくてもよかったのでしょうか。（笑）

司会 どうしてインドネシアを選んだんですか。

細田 沖縄との関係ですね。それがあるから、インドネシアをやったのではなくて、何かインドネシアに行っているときに沖縄との関係を見つけたりしたんです。たとえばカツオの一本釣りなんていうのは、宮古の漁民が行って教えたとか、それから、沖縄の人がスラウェシのもっと東の方の島々に渡って行って、そこで開発をして住み着いてしまったりとか、結構、沖縄との関係がありました。あとおもしろく思ったのは、外国人をオランダというんです。オランダのオランダ、沖縄もオランダというんです。これは何だろうと思って（笑）、沖縄の人自分たち以外の人オランダというんです。

倉沢 そのオランダはあのオランダなんですか。出島の時代、鎖国の時代に外国人といえばオランダ人だったという、そのオランダですか。

細田 オランダなんですよ。そういうのが面白いなという、魅力というか（笑）、そういう面白さがあります。

倉沢 一番最初は旅行者としてインドネシアにいらっちゃって、そこで面白さを発見したということなんですか。



柳原透氏

細田 そうです。だから、先生とは逆かなと思います。（笑）

司会 倉沢先生はどうだったんですか。

倉沢 私は観念上で（笑）。私の大学時代というのは、インドネシアはスカルノが倒れて、大虐殺なんていうのが起こっていて、ひどい時期だったんです。そういう関心と、スハルトになってから、日本が経済進出でどかっと出ていきましたね。そういうのでインドネシアというのは行ったことはないけれども、非常に気になる国だったんです。

司会 私たちのころはあまり、行ったことがあるから研究するというとはなかったですね。

倉沢 まだ行けなかったですから。

司会 私なんかも理屈でここだとフィールドを決めたけど、最初行ってみて、「えーっ、ここに1年もいなくちゃいけないの？」ってガックリしたものね。（笑）

中島 ぼくの場合はインドネシアというのは、学科の先生が東南アジアを研究されてたので、先生とはちょっと遠いところでインドネシアと決めました。それから30年近くたって、インドネシア、倉沢先生の日本の占領時代の影響が非常に大きいというのは、やはりスハルトが倒れた後でも非常に大きいなという印象を強く受けていて、魅力を語るというような、そういうのではなくて、オランダを含めて植民地支配の影響を最近、非常に強く感じるようになったんです。

今から10年前はあまりそういうところにはぼくの関心はなかったのですけれども、たとえばミナンカバウの土地問題とかをやっていくと、源泉はオランダ支配にまでさかのぼります。日本の影響はミナンカバウに限ってはあまりないんですけれども、そうした100年、150年という植民地支配の流れが現在を規定しているという認識が、いま非常に強いんです。

司会 いろいろとやればやるほど深いみたいナ……。 (笑)

中島 そうですね。でもインドネシアはこんなにすばらしいというようなことを最近とは言えませんね。 (笑)

細田 私もそうです。トラジャのなかでも日本が入ってきているので。

中島 ヘイホ (「兵補」, 日本軍の補助兵力として位置づけられ、その意味で自らの自由意志で参加した「義勇軍」とは異なる) の話がありましたよね。倉沢先生、絶対に言うかなと思っていたのですけれども、ずっと今まで我慢していたんです。 (笑)

細田 ヘイホがあるし、それから温泉なんかも日本が掘った。

中島 それはミナンカバウもそうです。

細田 そういうものが点々と。

倉沢 トラジャのあたりは労務者の徴発はどうだったんですか。あまり人口希薄だから徴発されていないのかな。ヘイホの方が多い？

細田 そういうのが裏の現実としてはたくさんあるけれども、面白いところだなというのが私のなかではあります。 (笑)

柳原 細田さんがこの本の中でトラジャ以外にもと言っているところ、それは即インドネシア全体にはならないのだけれども、トラジャ以外を含めて言っているときのくくり方というのは何なんでしょうかね。まさに魅力として、こういうトラジャ、そしてこの島、この島、この島というふうに言っているときに、それらをくくる言い方として、適切な言い方は何ですか。

【そして哲学へと回帰する】

細田 それは自分たちの宇宙観と、それから自分たちの生活観をそののなかで完全に持っている人たち。

柳原 が、今のインドネシア国内にいる。

細田 いくつかあるので、それが私には魅力です。

柳原 という言い方になるわけですね。

細田 はい。それはフローレスなんかもそうだし、だけど、フローレスでも全部ではないんです。スンバもそうですけれども、だから、そういうなかの一部の人たちは完全に自分たちの宇宙観と精神性と、その生活圏のなかで生死全うするという。

倉沢 そうなのですけれども、その歴史のなかでオランダがやってきて、日本もやってきて、スカルノ時代があって、今度、スハルトの開発独裁があって、外からの大きいインパクトにさらされて、よく不変でいられる。いや、不変ではないと思うんですね。絶対変わっていると思うんです。

細田 そう思います。

倉沢 その変化についてのご研究は、今のところあまり、視野に入れていらっしゃるんですか。

細田 いや、いや、変化も本当に微妙なところではたくさんあるから、そういう微妙なところがまだまだ、今の段階では微妙なままで、とりあえずはトラジャならトラジャという社会と世界で生きられるけれども、これがもうちょっとその変化が急激に、そして大きくなったときには、やっぱり変わらざるを得ないかなと私のなかにはあります。

倉沢 今後のですか。いや、私がおたずねしているのは過去においての変化です。歴史的な視点というのでしょうか、それはあまりご自分のなかでは関心をもっていらっしゃるんですか。

細田 私のなかでは事実として深く見ますけれども、その人たちを見るときには、そうであっても、ここの生活のときはどういうかたちの生活をしたのかなとか、生活の軸は何だったのかなとか、そこで生きるときの軸

は何だったのかなというようなところで、まず人を見たいというのがあります。ですから、事実としてはきちっと自分は見ますけれども、そんなことがあっても、彼らの軸は何かなみたいところで。

中島 細田さんのおっしゃることを人類学者の議論に変えますと、エスニック・アイデンティティとは何かとという問題として捉えることが可能です。民族は本質的なものか、あるいは関係的なものかという、そういう議論になっていくんです。両者はお互いを完全に排除するわけではないのですが。印象としては細田さんの議論は本質論に立っていると思われます。

司会 たぶんトラジャ以外にも雲の上の哲学者はいるのではないかとお考えですね。(笑)

中島 最初の疑問に戻るけれども、柳原先生の質問にも関連するのですが、哲学者という言葉をご自分でお使いになるのは構わないのですが、彼ら自身が哲学者であるかということ、やっぱり疑問だなという印象はあるんです。

司会 細田さんが考えた哲学であると。

中島 そうですね。

細田 彼らを見る。

中島 見るときに、それはやっぱり外部の者として見ているわけであって、ぼくが個人的に印象として受ける場合に、彼らが哲学者であるとするならば、彼らの置かれた状況を彼ら自身がどういうふうに分析しているかという視点がないと、哲学の問題とはいえないし、ただ単に、先祖とのかかわりという軸だけでは、ちょっと弱いかなという印象を受けたんです。

司会 そういうふうな人たちの生き方とか、そういうものを伝えたいということがすごく細田さんの心の中にある。

細田 伝えたいというよりも、何か自分が学べたということの方が大きい。

司会 あ、そうか。

細田 そうなんです。

司会 でも、伝えようと思ったから、本をお書きになったんですよね。

細田 ええ。だから、そういう意味での哲学とは何かとか、思想とは何かとか、それから歴史的な事実と照らし合わせたときには、たいしたことないじゃないという生き方というか、きっとトラジャ人は日常的にしているというふうに判断されてしまうのだけれども、いや、そうじゃないということ言いたかったという、そんな感じなんです。

何と言っていいかわからないですけども、人にはそれぞれ生きる一つの意味がある。だから、生があって、その先に死があるみたいなところを拾いたいというのがあったので、こういうのでいいかなと思っているんですけども。

司会 確かに葬儀自体がひっくり返るような、びっくりする代物ですよ。あれ自体、見たら一つ考えさせられます。そういう意味では本当は雲の上の哲学者はトラジャを見た細田さんではないでしょうか。(笑)

細田 そうかもしれません。

司会 というあたりで、もうちょっと何かまとめた方がいいですか。(笑)

細田 もういいんじゃないですか。(笑)

【終わりよければすべてよし】

司会 では、お時間もよろしいようですので、座談会『雲の上の哲学者たち』を終わらせていただきます。みなさま、長時間おつきあいいただきまして、大変ありがとうございました。またの機会にお目にかかりますまで、今日はこれで失礼いたします。